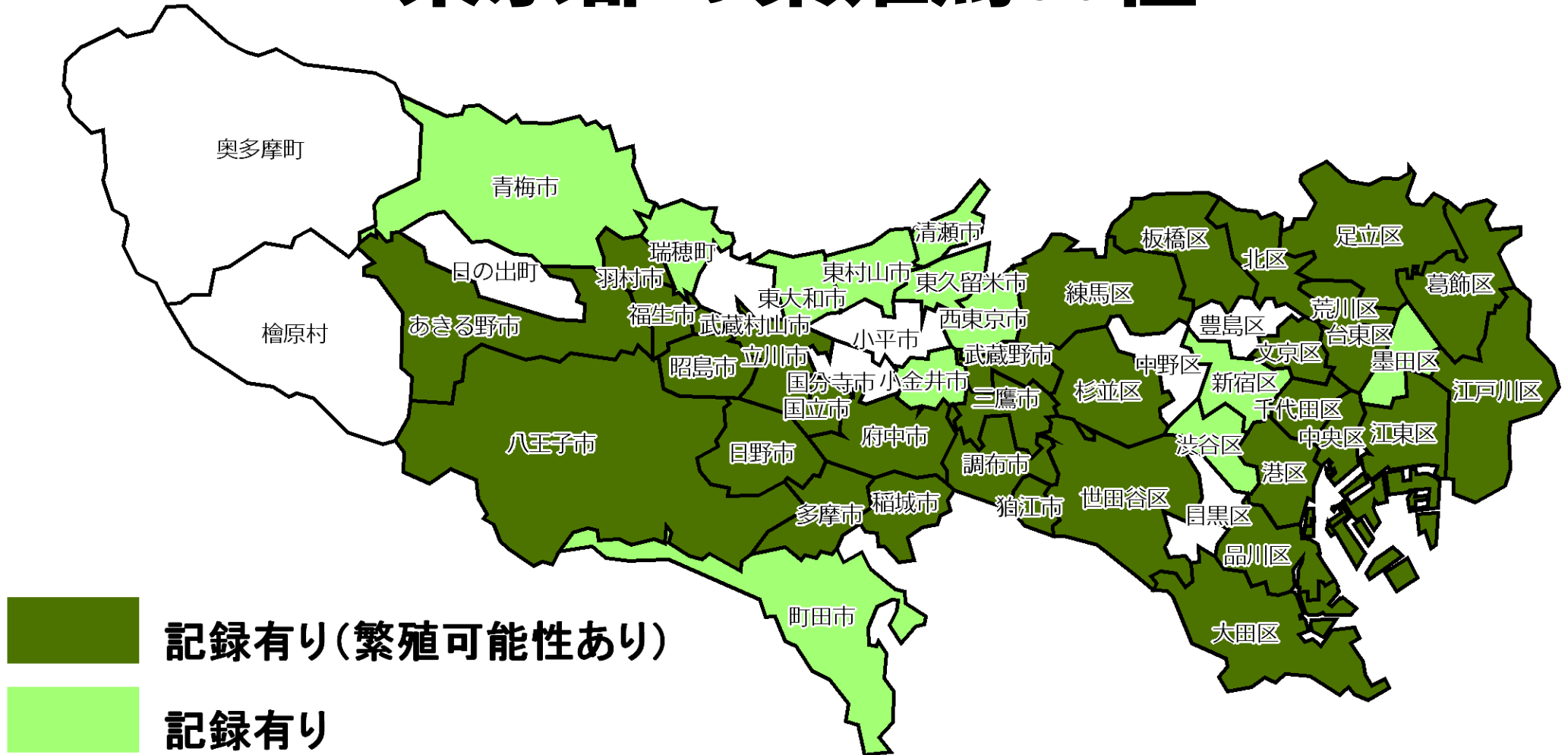


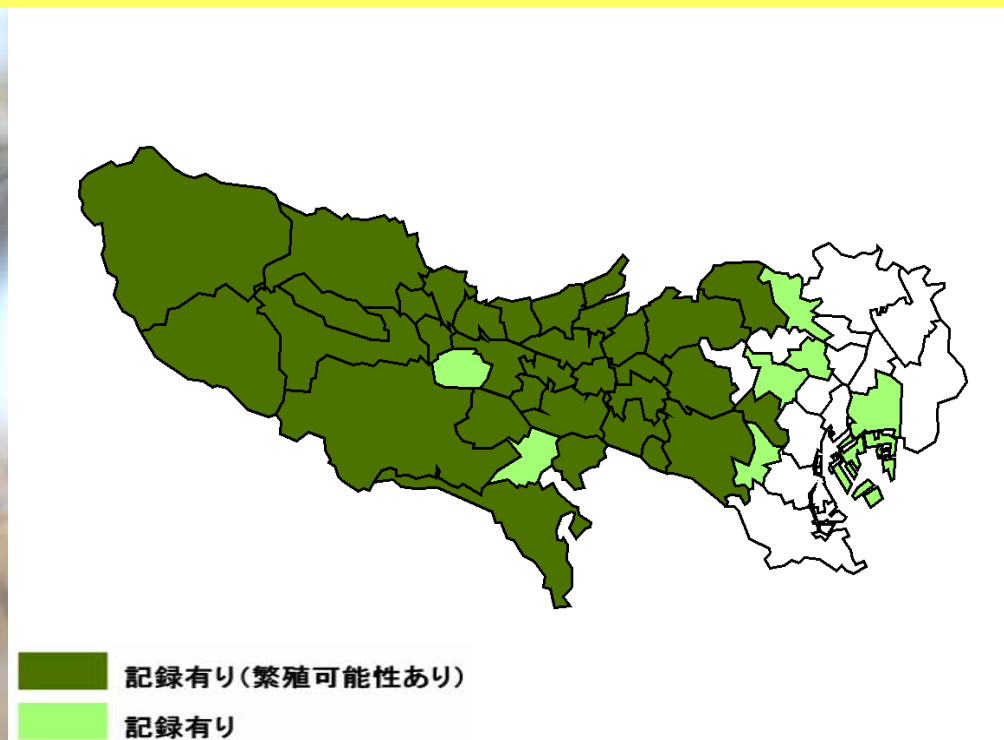
東京都の繁殖鳥50種



アオゲラ

緑啄木鳥 Japanese Green Woodpecker *Picus awokera*

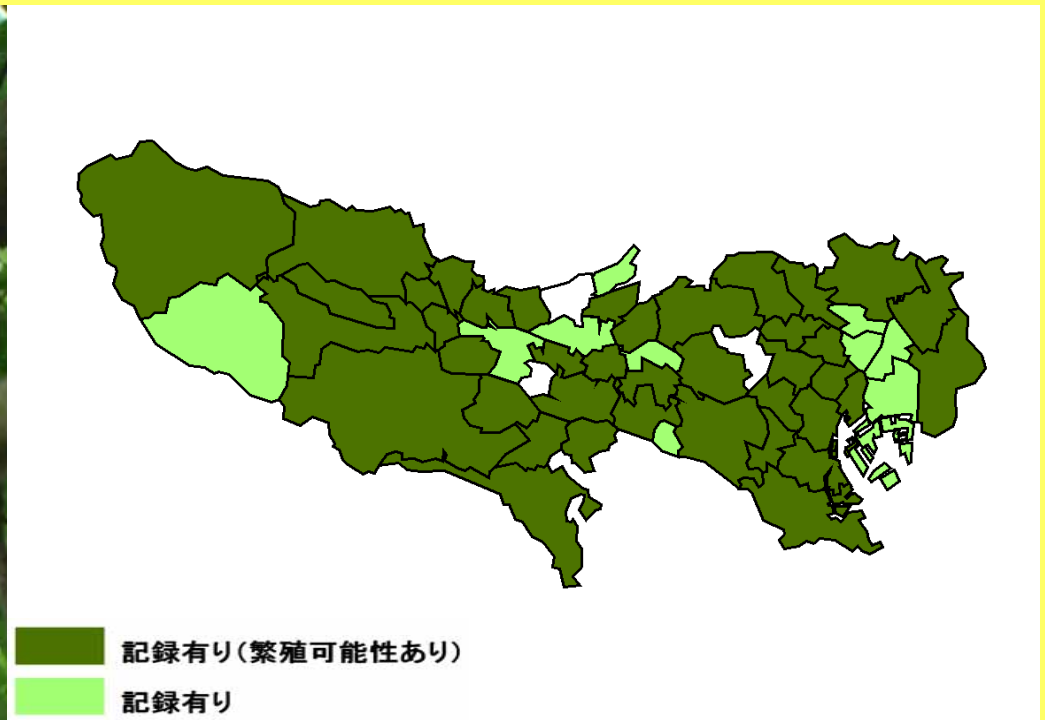
留鳥として、かつてはおもに奥多摩地区に分布していたが、近年、多摩地区や23区内でも生息・繁殖するようになってきた。この鳥は、本来、平地の森林でも繁殖するので、1990年代になって平地部にも分布を広げていったことは、住宅地や市街地の緑地が成長し、繁殖できるような環境ができたことを意味している。杉並区や練馬区などで、複数個所で繁殖をし、都心部の明治神宮（渋谷区）でも営巣した。



アオバズク

緑葉木菟 Brown Hawk Owl *Ninox scutulata*

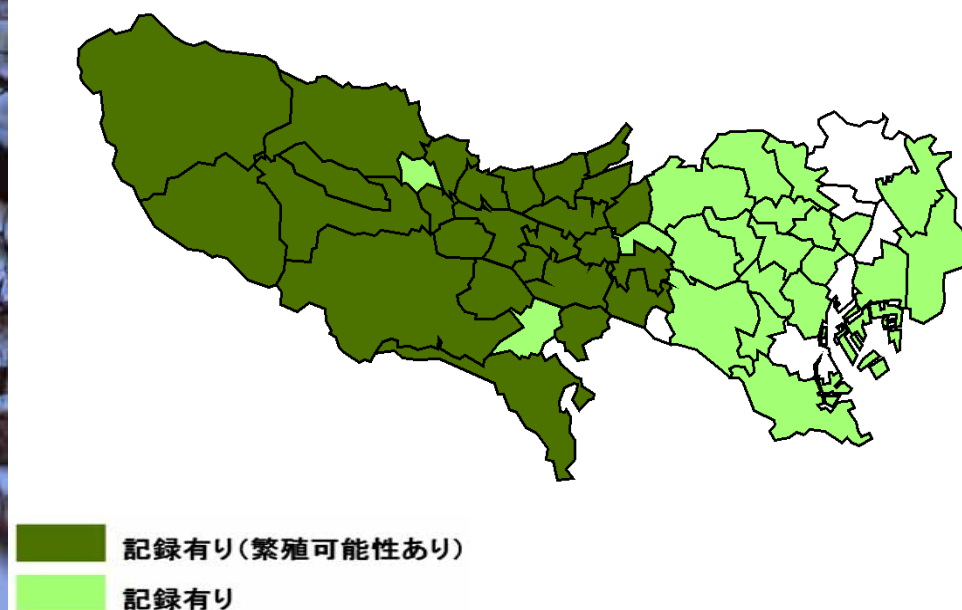
夏鳥として渡来し、大径木の洞などで繁殖する。かつては都内各地で繁殖が見られたが、各地で激減した。しかし、目黒区や世田谷区、杉並区など23区内でも最近まで繁殖が記録されていた。橋梁や構造物の隙間も利用することがあり、思わぬ箇所で繁殖していることもあり、樹洞やエサ資源(主に昆虫類)が確保できれば、社寺林や屋敷林規模の樹林で繁殖が可能である。現在は多摩地区を中心に少数繁殖しているが、1998年には、明治神宮で繁殖したことが報告されている。



イカル

桑鳩 Masked Grosbeak *Eophona personata*

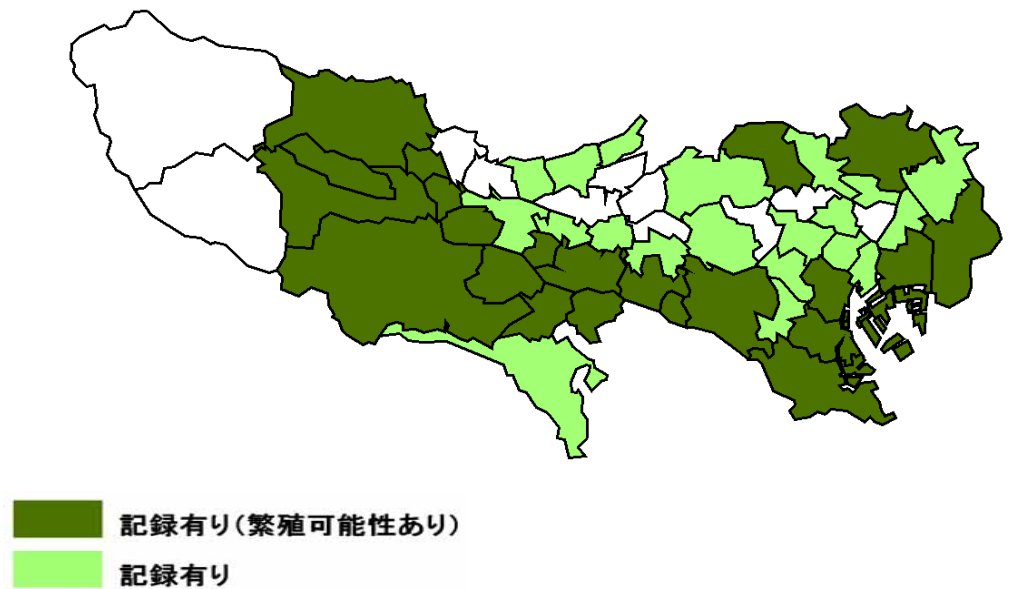
留鳥として、平地から山地の落葉広葉樹林で営巣し、東京では多摩地区から奥多摩の低山帯間で広く生息し、繁殖している。東京都が実施した1970年代と90年代の繁殖期調査を比較すると、90年代は、多摩丘陵での繁殖記録がなくなり、逆に狭山丘陵では増加が見られ、三鷹市～国分寺市あたりに新たに記録されるといった動きがある。



イソシギ

磯鶺 Common Sandpiper *Actitis hypoleucos*

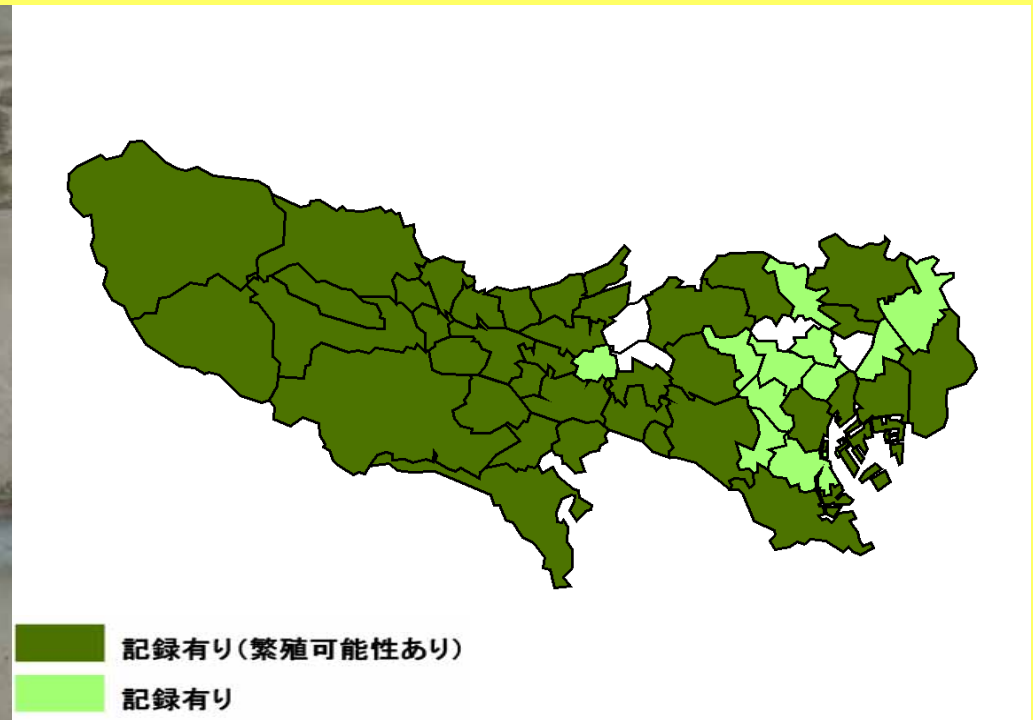
留鳥として、多摩川や荒川の河川敷、東京湾岸の浜辺、また、野川、石神井川、黒目川、柳瀬川などの市街地を流れる川などに生息し、奥多摩の山地をのぞき、広く記録されている。繁殖は、おもに多摩川、荒川河口、東京湾岸で、背の低い草むらなどの地上を好み、調布・府中・稲城・多摩市などの多摩川流域での記録が多い。東京都の1970年代と90年代の繁殖鳥の調査では、90年代になって、多摩川本流での記録が少なくなって、浅川・秋川などの支流で多くなっている。



イワツバメ

岩燕 House Martin *Delichon urbica*

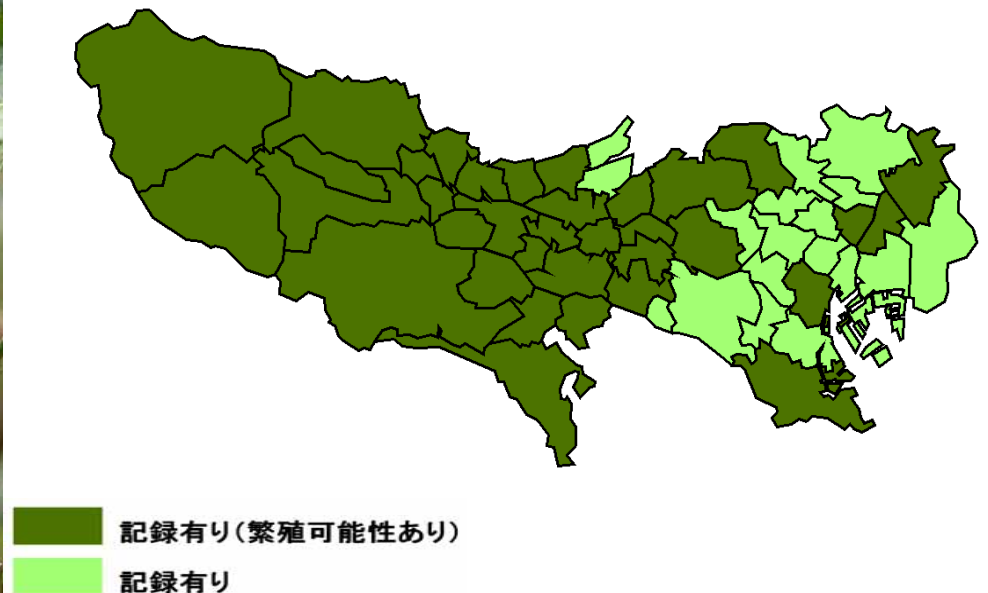
夏鳥として、かつては多摩地区から奥多摩地区にかけて渡来し、駅や人家などに大きなコロニーを形成していた。近年は市街地にも進出し、23区内でも繁殖をしている。多摩川や荒川にかかる橋、高速道路、大規模倉庫など、コンクリート建造物などを好んで営巣するが、都心に近づくほどコロニーの規模が小さくなる傾向が見られる。一時は都心部まで繁殖分布を広げる情勢であったが、最近はその勢いが無い。



ウグイス

鶯 Bush Warbler *Cettia diphone*

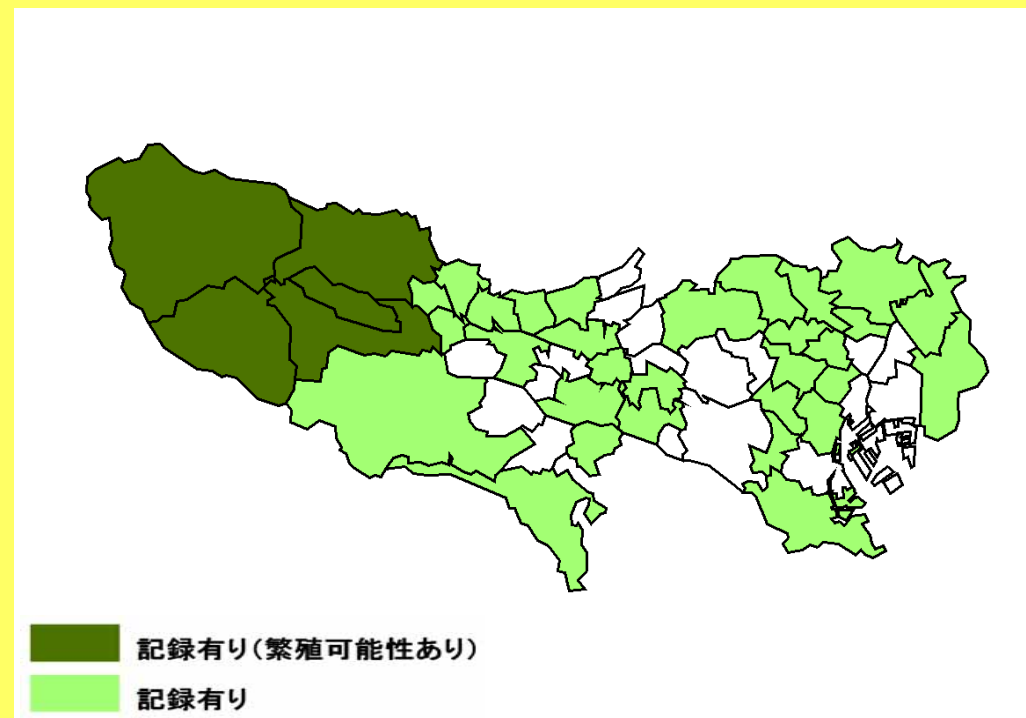
東京では典型的な漂鳥で、奥多摩の山地部で繁殖し、平地部には冬鳥として飛来する。そのため、全自治体で記録されている。しかし、本種は藪があれば平地でも繁殖する鳥なので、以前から越夏が記録されていた。最近になって多摩地区で留鳥化の傾向が見られることから、東京の市街地の緑の状況が多少変わってきた可能性を示唆していると考えられている。



ウソ

鶯 Bullfinch *Pyrrhula pyrrhula*

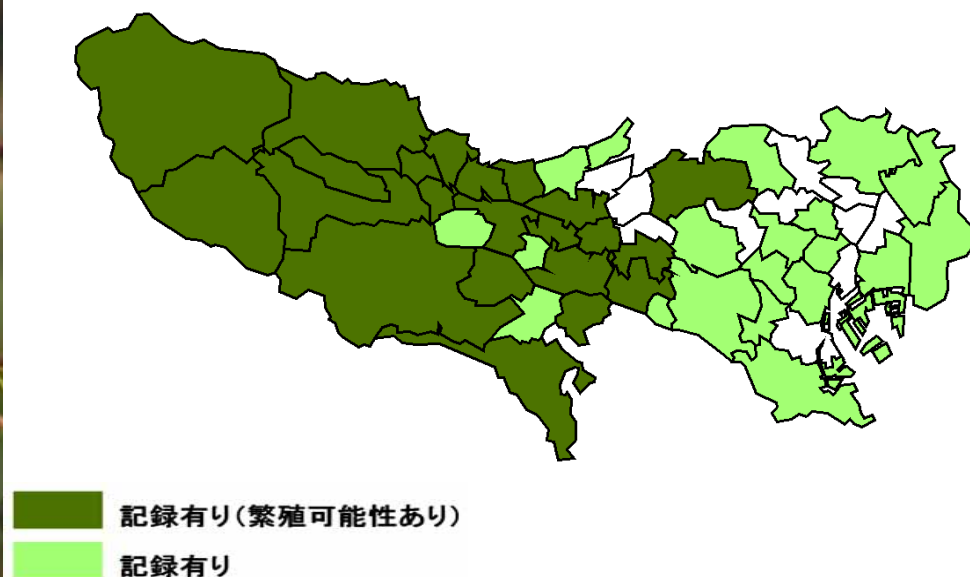
留鳥として、奥多摩地区の亜高山帯の針葉樹林に少数生息し、繁殖している。1970年代の東京都の繁殖期調査では、雲取山、天祖山、鷹の巣山、天目山の山頂付近で観察されたが、90年代の調査では、標高の低い奥多摩湖周辺でも確認されているので、今後の動向が注目される。秋冬期には低地へ漂行し、年によっては、都心部の緑地でも観察されることがある。



エナガ

柄長 Long-tailed Tit *Aegithalos caudatus*

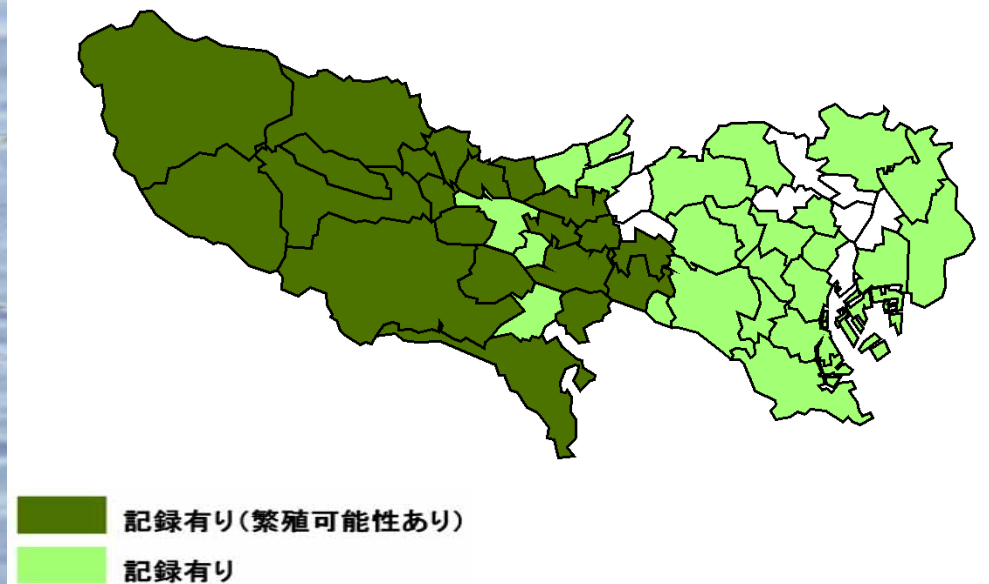
留鳥として、従来は多摩地区の丘陵地以上の標高に生息し、平地にはほとんど飛来しない森林性の鳥とされていたが、1980年代から、多摩地区の一部で留鳥化し始め、最近が多摩地区ばかりでなく、23区でもその傾向が強まっている。しかし、本種は全国的に見れば平地でもふつうに生息する鳥なので、逆に今までなぜ分布していなかったのが疑問とされていて、平地部の緑が量的に増大した可能性が指摘されている。



オオタカ

蒼鷹 Goshawk *Accipiter gentilis*

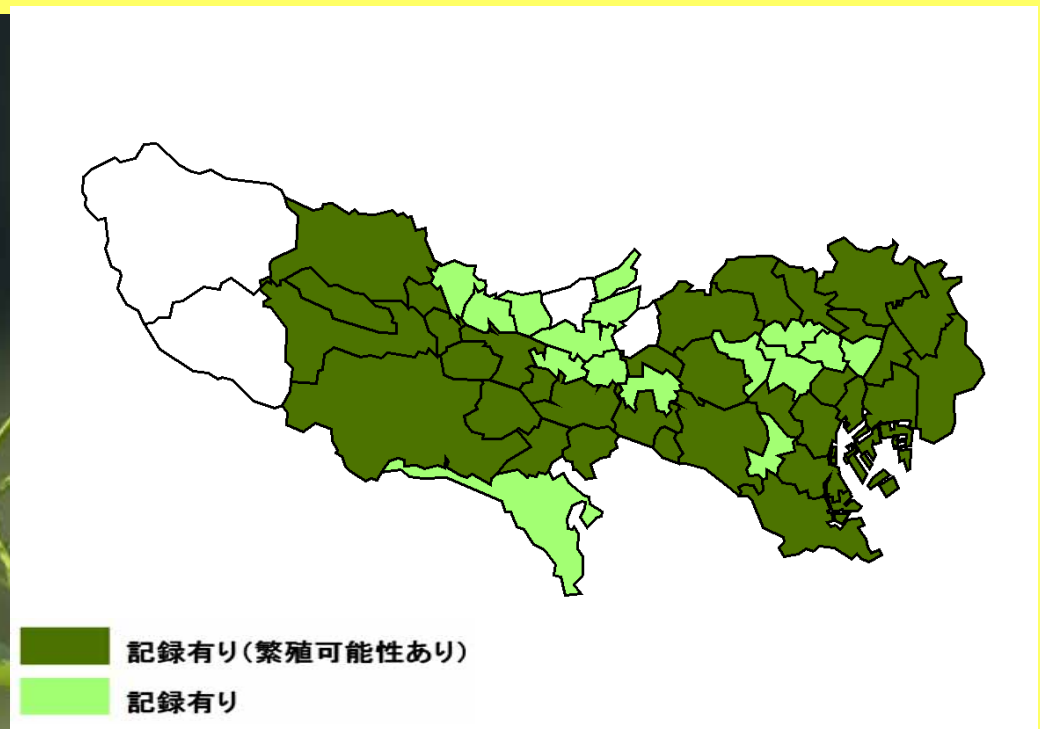
留鳥として、調布市や三鷹市以西の地域で繁殖が確認されている。1980年代からは狭山丘陵で繁殖が知られるようになり、「密猟監視」などの保護活動が活発に行われた。90年代以降は個体数の増加が指摘され、奥多摩地区を中心に、団地造成やトンネル工事などの開発事業地でその営巣が見つかり、各地で保護問題が話題となった。近年では規模の大きな都市公園などでも繁殖が記録されていて、都心部の皇居(千代田区)では夏期にも生息が記録されるようになった。食べ物として、ドバトに依存する割合が全国的に増えており、こうしたことも個体数の増加や都市進出の要因となっていると推測される。



オオヨシキリ

大葦切 Great Reed Warbler *Acrocephalus arundinaceus*

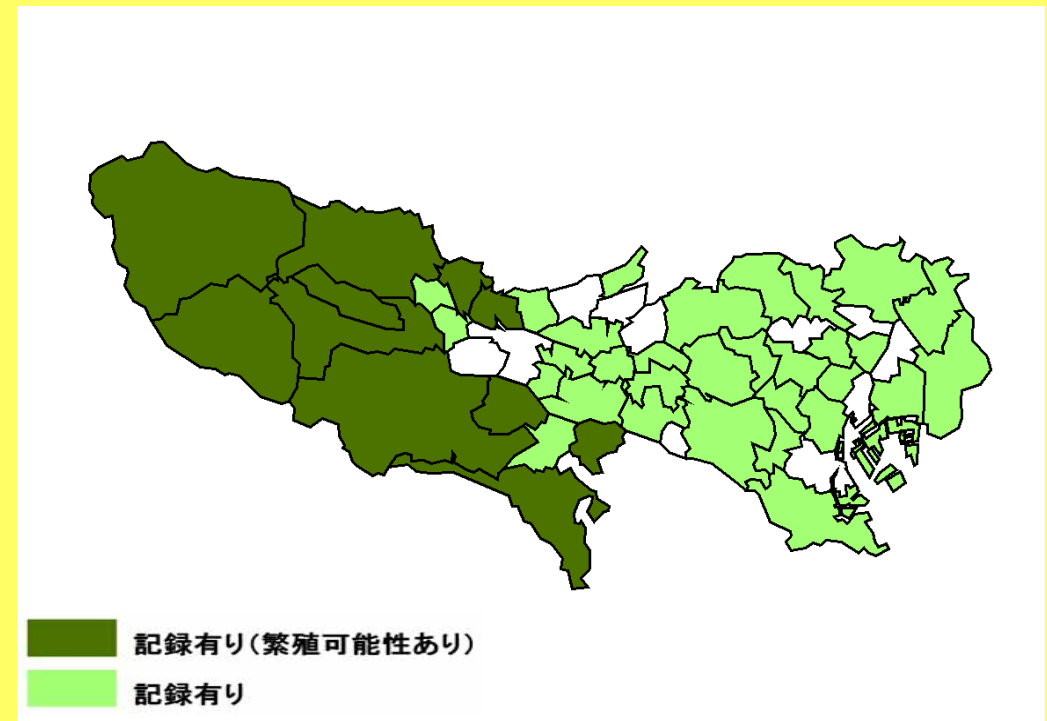
夏鳥として、多摩川中下流部や荒川の河川敷、湾岸部などのヨシ原に渡来し、繁殖する。河川敷の公園やスポーツ施設造成、埋立地内の湿地の埋め立てなどにより、ヨシ原が減少し、本種の生息地が減少している。繁殖地以外では、4月下旬～5月下旬の春の渡りの時期に通過個体が観察され、囀りを聞くことも多い。そのため、奥多摩の山地部を除くほとんどの自治体で記録されている。



オオルリ

大瑠璃 Blue-and-White Flycatcher *Cyanoptila cyanomelana*

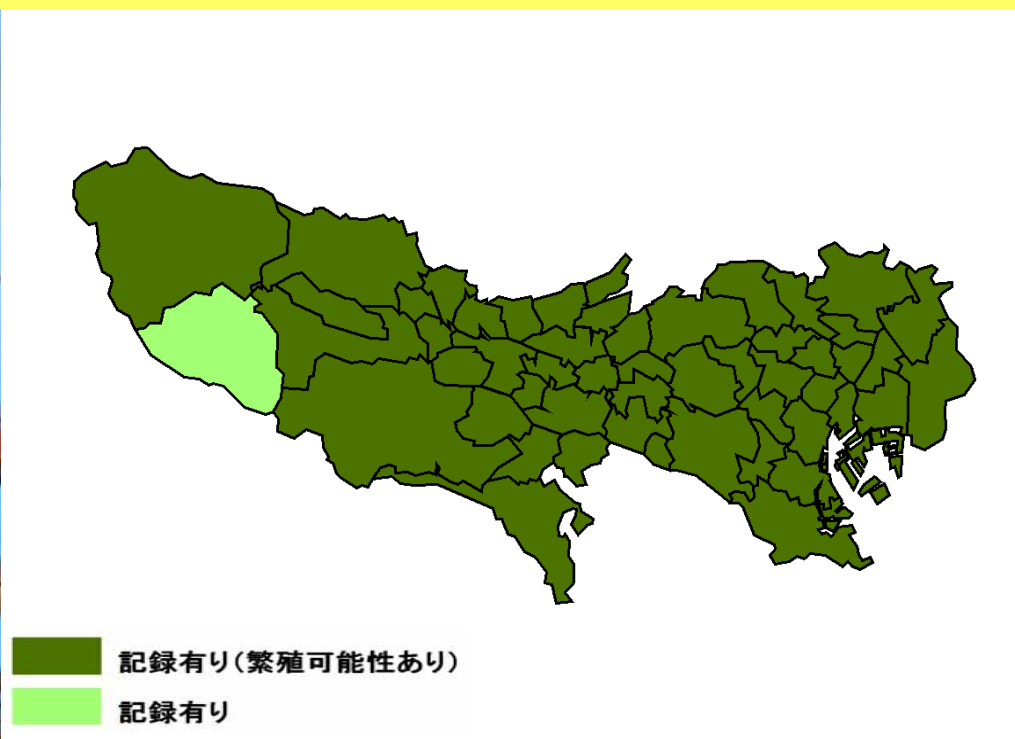
夏鳥として、奥多摩地区の溪流沿いの林に生息。1970年代の東京都の繁殖期調査では、町田市や稲城市でも記録されたが、90年代は記録されなかった。しかし、91年に「市の鳥」に制定された八王子市では、「八王子・日野カワセミ会」によって毎年調査がされ、個体数は増えていることが報告されている。なお、都心部などの緑地でも、春・秋に通過する個体が観察され、4月中旬～5月上旬には囀りも聞くことができる。



オナガ

尾長 Azure-winged Magpie *Cyanopica cyana*

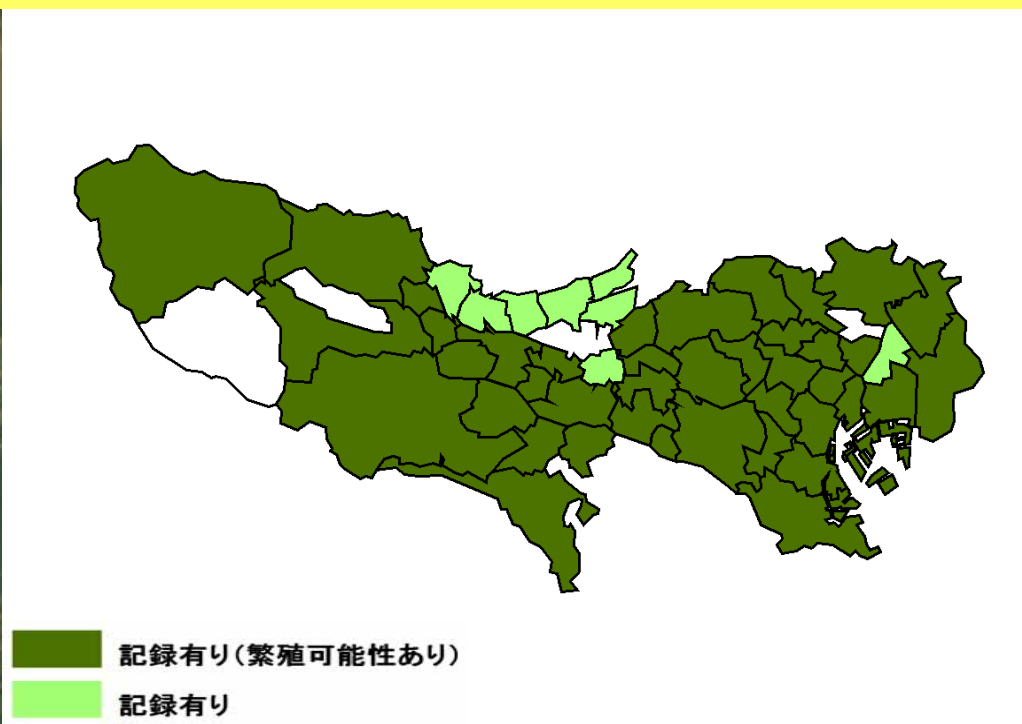
留鳥として、都市部の市街地や都市公園、丘陵地などの樹林に生息する。山地よりも丘陵地までの地域に多く、また、奥多摩の山地では、村落部にだけ生息している。檜原村では繁殖情報が報告されていない。単独のつがいだけでなく、複数つがいが集まって集団で繁殖する場合もあり、ツミとの共生関係がみられる地域もある。非繁殖期には集団で活動するようになり、河川敷の疎林などでも観察されるようになる。



カイツブリ

鴯 Little Grebe *Tachybaptus ruficollis*

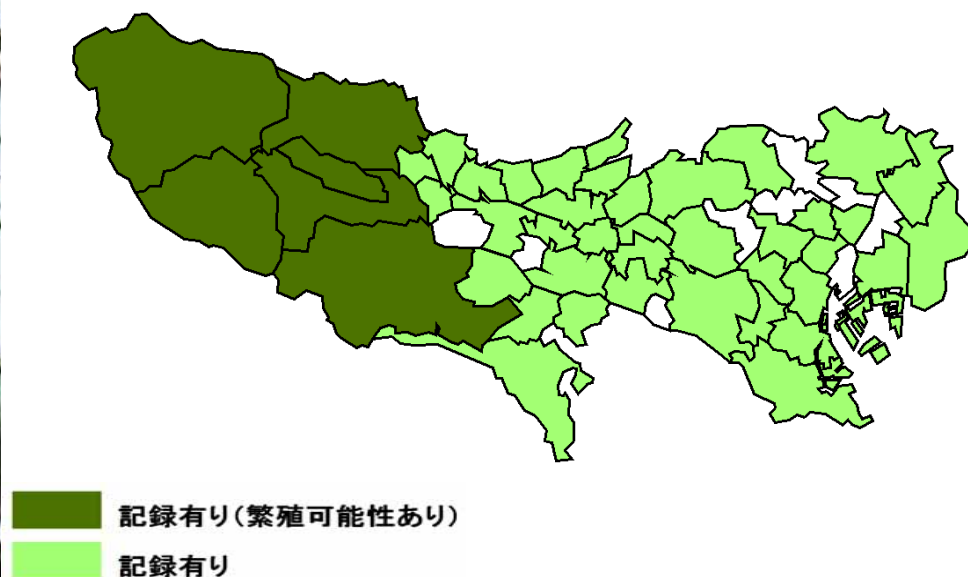
留鳥として、池や流れのゆるやかな川などにふつうに生息している。東京湾岸から奥多摩地区まで、適した水辺があれば営巣している。多くの区市町村で繁殖が記録されていて、冬期繁殖の事例もある。一般には“浮き巣”をつくるが、井の頭公園などの池では、水中の杭などの上に造巣する例もある。全国的にやや減少傾向が見られ、東京でも同様であるが、1970年代に比べ、90年代には東京湾岸地域で繁殖増加している。これは、埋立地が整備され、公園などが造成されていることと関係があると思われる。



カケス

樫鳥 Jay *Garrulus glandarius*

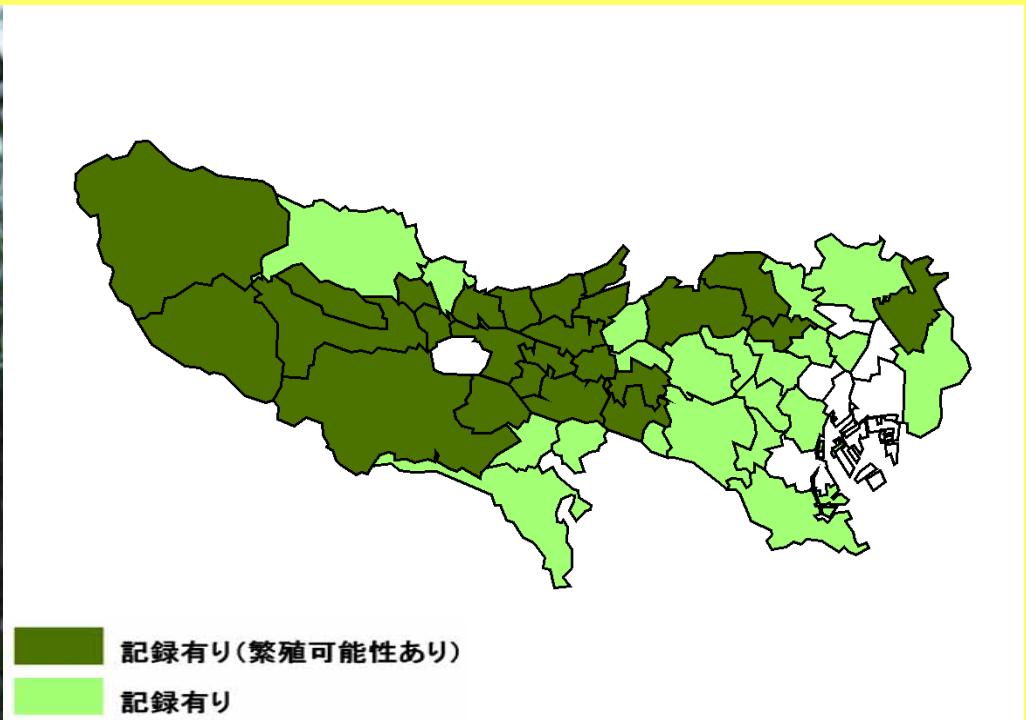
留鳥として、奥多摩地区の標高200m以上の山地にふつうに生息し、繁殖している。それ以下の狭山丘陵や多摩丘陵でも少数繁殖期に観察されている。秋冬期には低地に漂行するため、丘陵地や平地の緑地で小群越冬する。かつては明治神宮や新宿御苑などの都心部の緑地にも定期的に飛来し、越冬していたが、最近は記録があまりない。しかし、移動性が高いため、区市町村の多くで記録されている。



カッコウ

郭公 Cuckoo *Cuculus canorus*

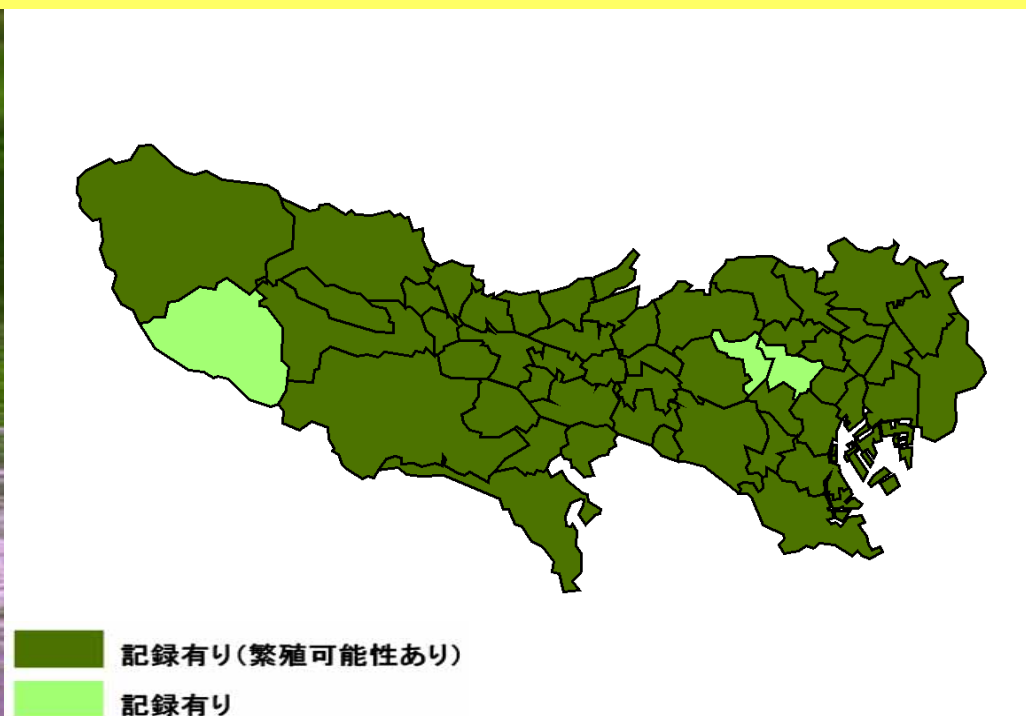
夏鳥として、高原などに渡来するというイメージの強い鳥だが、多摩地区に少数飛来し、繁殖もしていると思われる。鳴き声が大きく、特徴的なためか、都心や下町以外の自治体では記録されている。東京都が1970年代と90年代に行った繁殖期調査では、武蔵野地域で広く越夏が認められたが、90年代は減少している。托卵鳥で、相手としてはモズやオオヨシキリがよく知られているが、オナガの事例も増えている。



カルガモ

軽鴨 Spot-billed Duck *Anas poecilorhyncha*

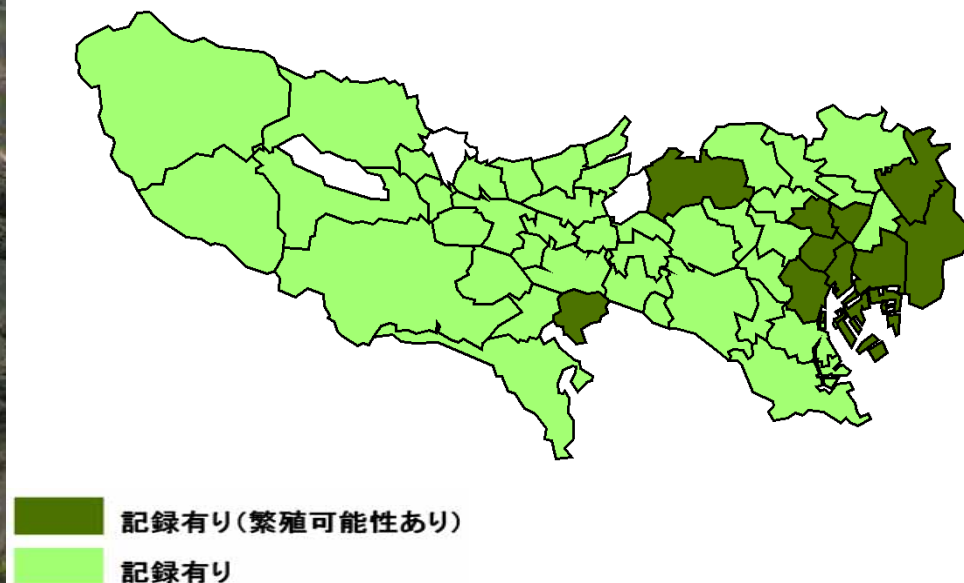
留鳥として、奥多摩地区の山間部を除く、河川や池、湾岸の水辺などに多数生息している。水辺の草むらなどの地上で営巣するのがふつうであるが、ビルや市役所、学校のベランダや屋上など、人工建造物を利用する例が増えている。また、市街地の中小河川でヒナ連れを見る機会も増えている。東京都の調査でも、1970年代に比べ、90年代は繁殖分布が拡大している。しかし、アヒルやアイガモなどとの交雑が見られ、種の混乱が問題視されている。



カワウ

河鵜 Cormorant *Phalacrocorax carbo*

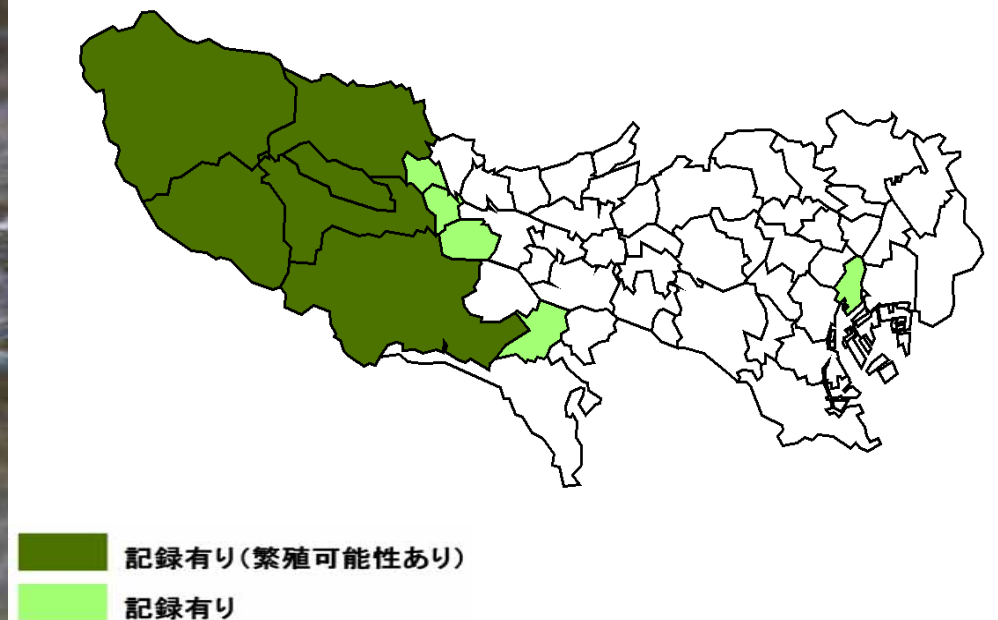
留鳥として、東京湾岸、荒川・江戸川・多摩川などの河川、公園の池、湖などの水辺に生息する。かつては、営巣地は上野の不忍池に限定されていたが、1970年代以降個体数が増加し、80年代には営巣地が拡大し、浜離宮(中央区)、お台場(港区)、水元公園(葛飾区)などで繁殖している。水辺への飛来や上空通過でほとんどの自治体で記録されている。多摩川では90年代には中上流域まで分布を広げた。個体数の増加に伴い、放流魚への食害や営巣木の枯損の問題が発生している。



カワガラス

河鳥 Brown Dipper *Cinclus pallasii*

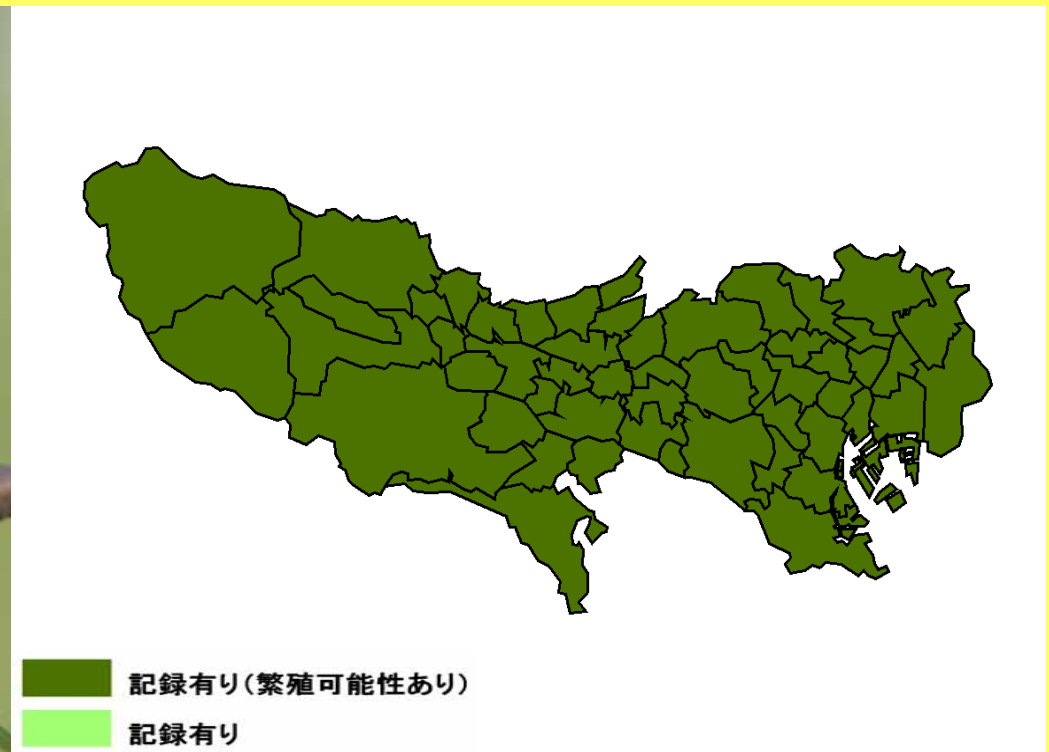
留鳥として、奥多摩地区の溪流にすみ、繁殖している。観察数は少なく、繁殖期の記録は八王子・青梅・あきる野・瑞穂市、日の出・奥多摩町である。しかし、奥多摩支部の記録では、多摩川中流域の昭和堰・羽村堰、平井川中流域、羽村市玉川上水などでも観察されている。記録が少ない理由として、繁殖時期が他の鳥より早く、調査時期とずれていることも考えられ、調査法の改良も必要と思われる。



カワセミ

翡翠 Kingfisher *Alcedo atthis*

留鳥として、各地の公園・庭園などの池、多摩川およびその支流の野川、浅川、平井川などや、荒川支流の黒目川・落合川、柳瀬川などに広く生息し、繁殖している。1970年代までは数を減じ、生息地が奥多摩地区まで後退していたが、80年代に入ると復活をし、1988年からは、都心にある自然教育園（港区）で繁殖をつづけるようになった。90年代に入ると、23区内の各地で繁殖が見られ、ほとんどの自治体で生息が記録されるような状況である。



カワラヒワ

河原鶉 Oriental Greenfinch *Carduelis sinica*

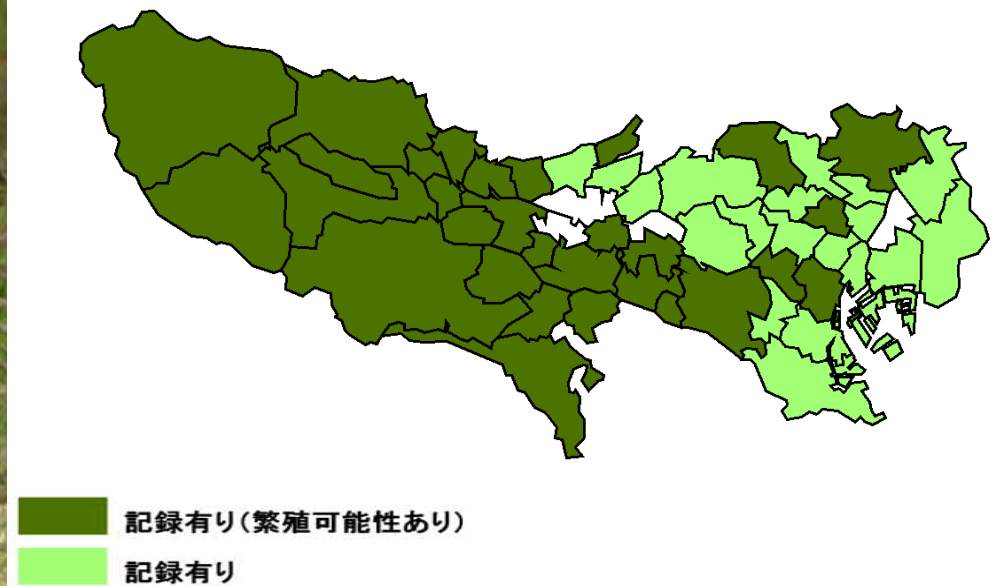
留鳥として多数生息し、全自治体で繁殖期の記録がある。東京都が1970年代と90年代に実施した繁殖期調査の結果を比較すると、その分布はあまり変わらない。しかし、70年代は、奥多摩地区では記録が丘陵部までであったのが、90年代は低山地帯まで広がっている。また、下町地区でも確認記録が多くなっていて、全体的に拡大傾向にあるとみられる。



キジ

雉 Pheasant *Phasianus colchicus*

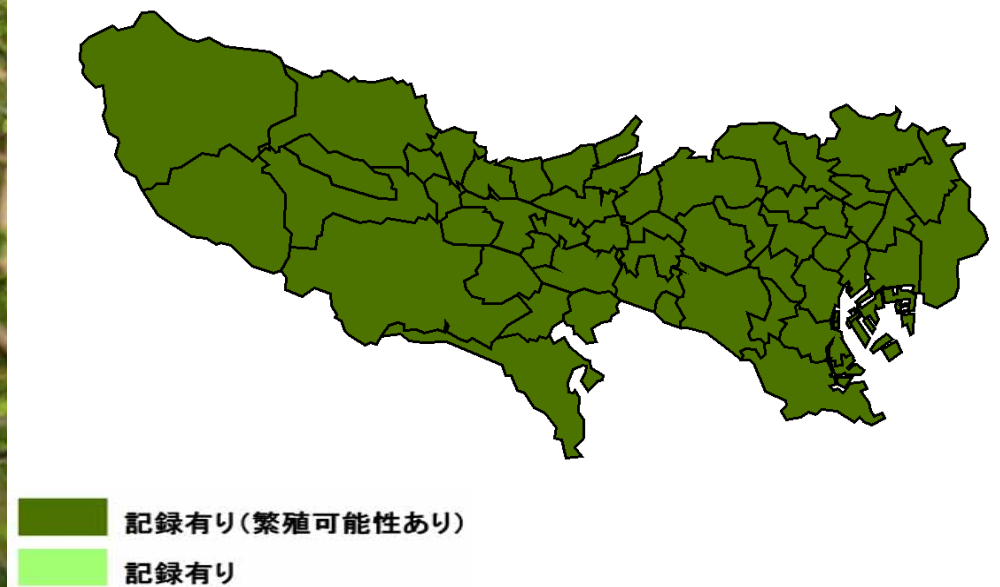
留鳥として、平地から丘陵地にかけての農耕地や藪の多い草地、河川敷などに生息する。東京都が実施した1970年代と90年代の繁殖期調査を比較すると、多摩地区から奥多摩地区の丘陵地、多摩川河川敷あたりの分布は共通するが、70年代には皇居、明治神宮などで記録されていたものが、90年代には全くなっている。また、90年代には多摩川中流域（世田谷区～調布市）の川沿いでも記録されている点が異なっている。地上営巣性のため、野ネコによる被害が大きいと考えられる。



キジバト

雉鳩 Oriental Turtle Dove *Streptopelia orientalis*

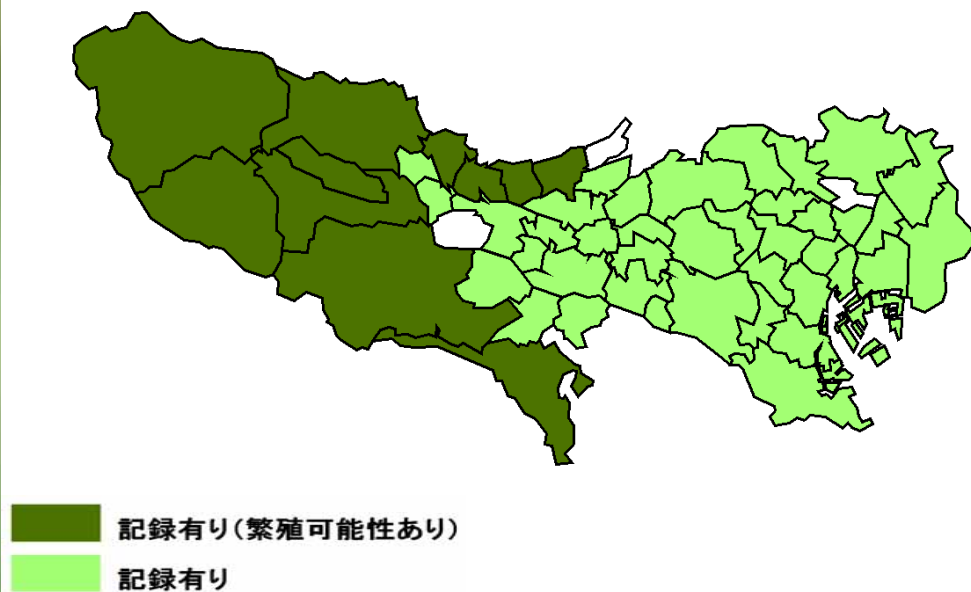
留鳥として都内全域で多数繁殖している。スズメ、カラスに次いでもっとも身近に生息している鳥であるが、かつては冬鳥で、人を怖れていたことが知られている。1950年ごろから個体数が増え、人前に姿を見せるようになり、70年ごろからは駅や倉庫のひさしなど、人工建造物で営巣するようになった。東京都が1970年代と90年代に行った繁殖期調査を比較すると、70年代は江戸川・江東・隅田区などの下町で記録が少なかったのに比べ、90年代は繁殖が記録され、繁殖地が都内全域に拡大していることがわかる。



キビタキ

黄鶇 Narcissus Flycatcher *Ficedula narcissina*

夏鳥として、山地や丘陵地の広葉樹林に渡来し、繁殖している。東村山市の狭山丘陵で繁殖確認、八王子市の加住丘陵などで繁殖可能性大などの記録があり、それ以下の標高でも繁殖可能性がある。高尾山付近では、他の夏鳥が激減しているなかで、あまり減っていないようである。春は4月中旬～5月上旬、秋は9月中旬～10月中旬にかけて都内の緑地を通過し、ほとんどの区市町村で記録されている。

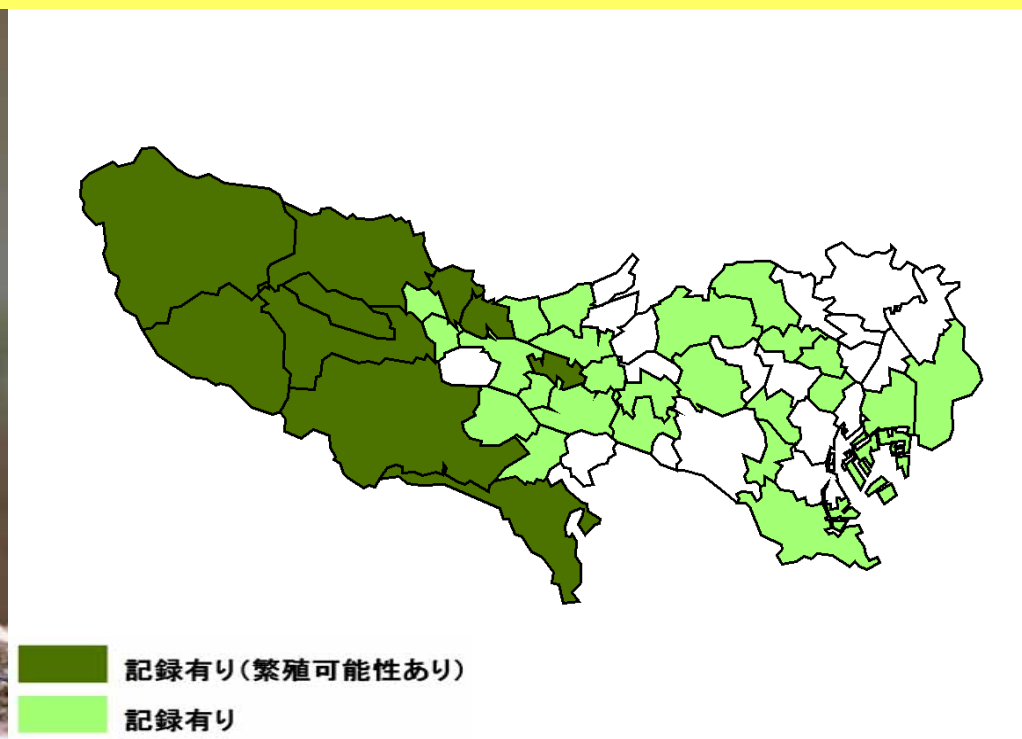


クロツグミ

黒鶇 Grey Thrush *Turdus cardis*

夏鳥として、奥多摩地区に渡来し、おもに標高200m以上の地域で繁殖している。1970年代後半から生息地が増えてきて、80年7月に八王子市で繁殖が確認された。また、78年春には府中・小金井市の多摩霊園で継続的に観察され、繁殖したと思われる記録がある。90年代の東京都の調査でも国分寺市で繁殖期に記録されている。

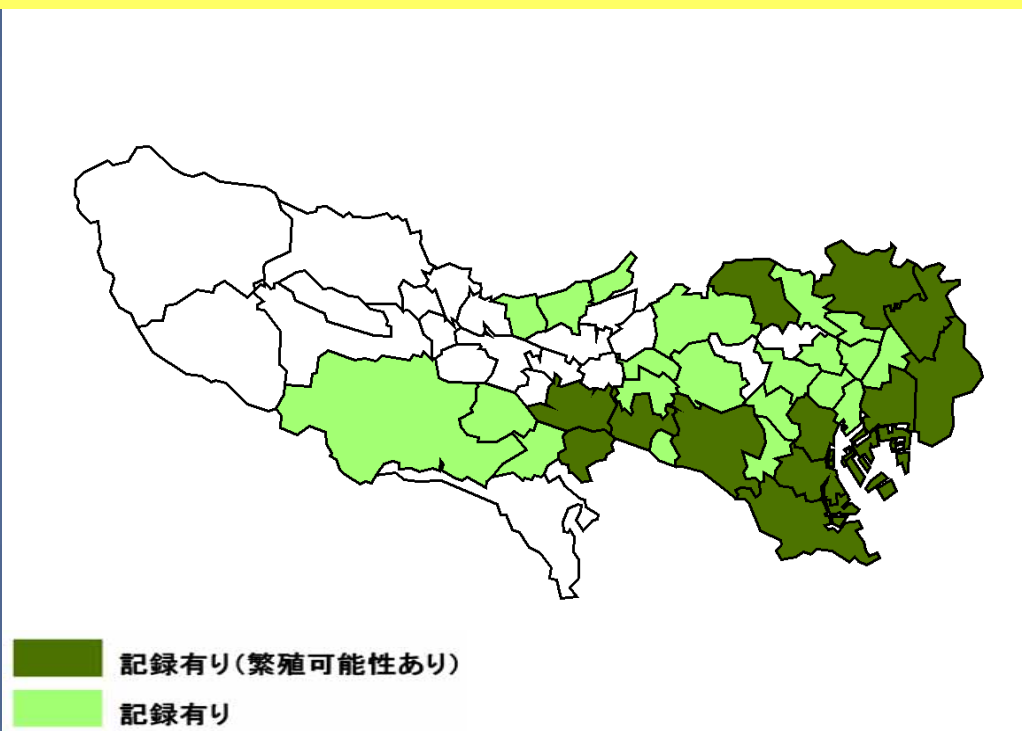
本種の囀りに似たフレーズを、ガビチョウが発することがあり、注意が必要である。



コアシサシ

小鰲刺 Little Tern *Sterna albifrons*

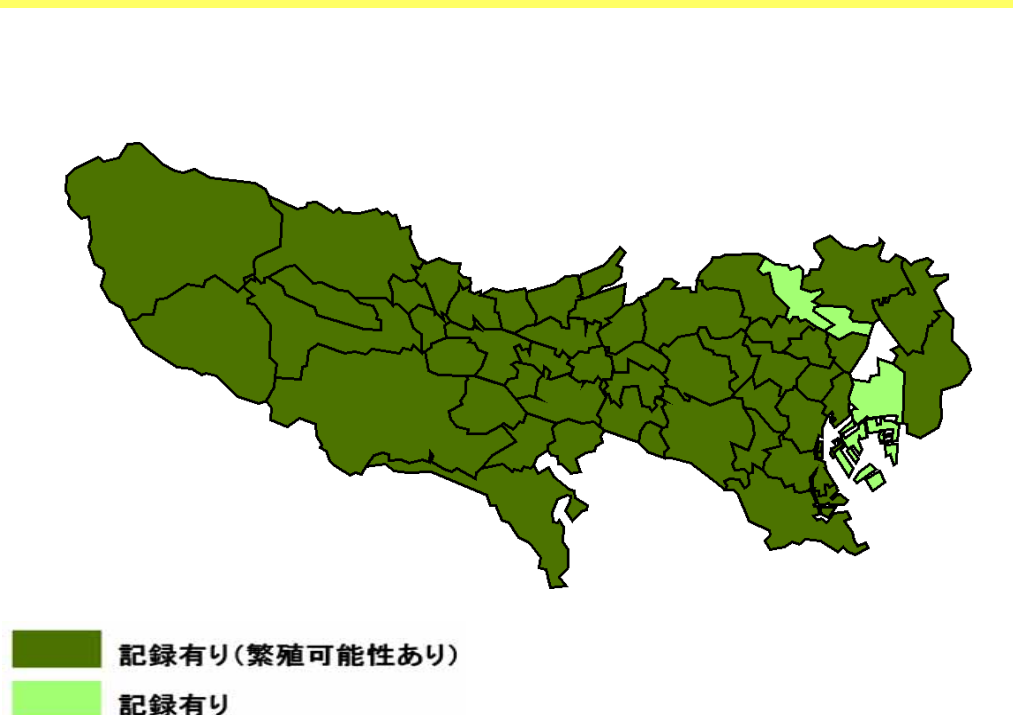
夏鳥として、多摩川中下流や荒川の河川敷、東京湾岸の埋立地などに渡来し、中州や砂礫地で少数繁殖している。1997年に30年ぶりに調布市多摩川での繁殖復活が記録された。東京湾岸では、江東区の埋立地の駐車場、江東区地先の中央防波堤埋立地、大田区の大井埋立地・羽田国際空港地先などで、コロニーを形成しているがほとんど安定せず、1年ごとに場所を変えている状態である。



コゲラ

小啄木鳥 Japanese Pygmy Woodpecker *Dendrocopos kizuki*

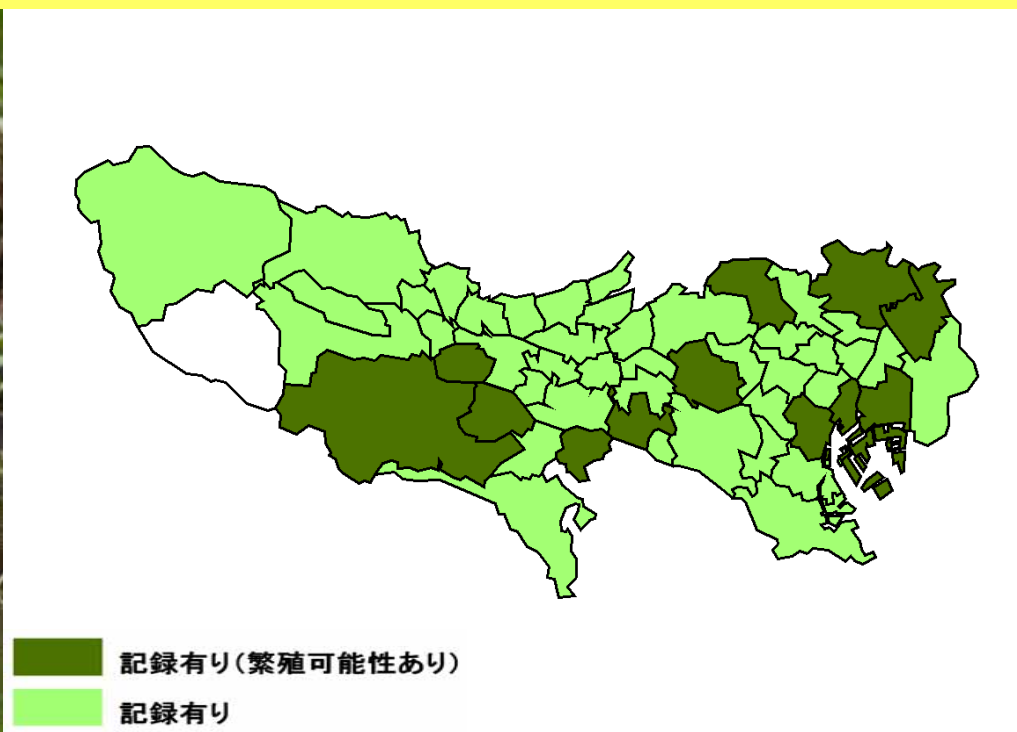
留鳥として、かつては多摩地区の丘陵地から奥多摩の山地にかけてしか生息しなかったが、1980年代になって、平地部の住宅地や市街地、都心部、下町まで分布を広げ、繁殖するようになった。これは、平地部の雑木林や街路樹、庭や公園の木が成長し、枯れ木や枯れ枝が生じたため、木の枯れた部分にしか巣穴を掘れない本種にとって、新しい生息地ができたためだと考えられている。



コサギ

小鷺 Little Egret *Egretta garzetta*

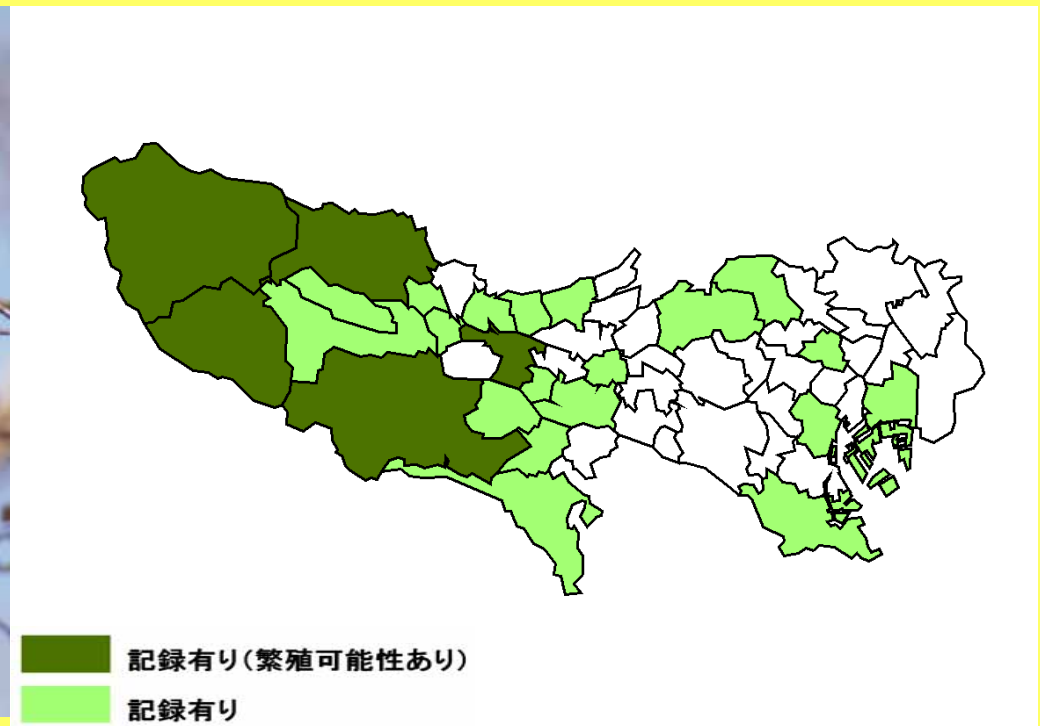
留鳥として、湾岸や河川、公園の池など、都全域の水辺でふつうに見られ、「シラサギ」の中では一番数が多い。檜原村を除く全自治体で記録され、公園の池(中央区・江東区・足立区)、多摩川の河川敷(調布市・日野市)などで繁殖が確認されている。奥多摩地区でも、山地を除く水辺でふつうに観察されるが、夏期はやや少なくなる傾向が見られる。



ゴジュウカラ

五十雀 Nuthatch *Sitta europaea*

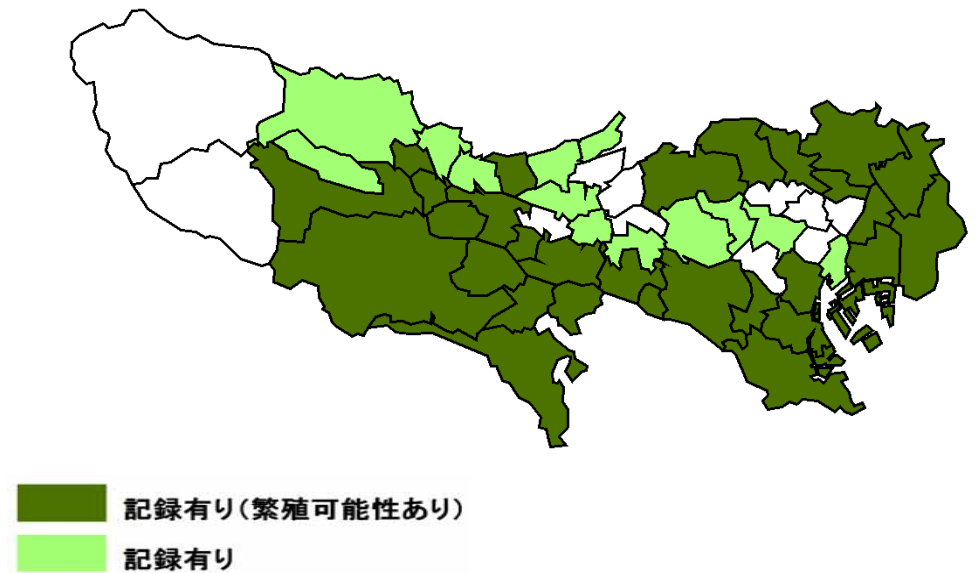
留鳥として、おもに標高800m以上の奥多摩地区の落葉広葉樹林に生息し、繁殖しているが個体数は多くない。1970年代の東京都の繁殖期調査では、標高600mの高尾山でも繁殖が確認されているが、90年代の調査では記録されていない。また、全体的に繁殖ランクが落ちている。カラ類のように、秋冬期に低地へ漂行することは少ないため、平地部での観察記録はあまり多くない。



コチドリ

小千鳥 Little Ringed Plover *Charadrius dubius*

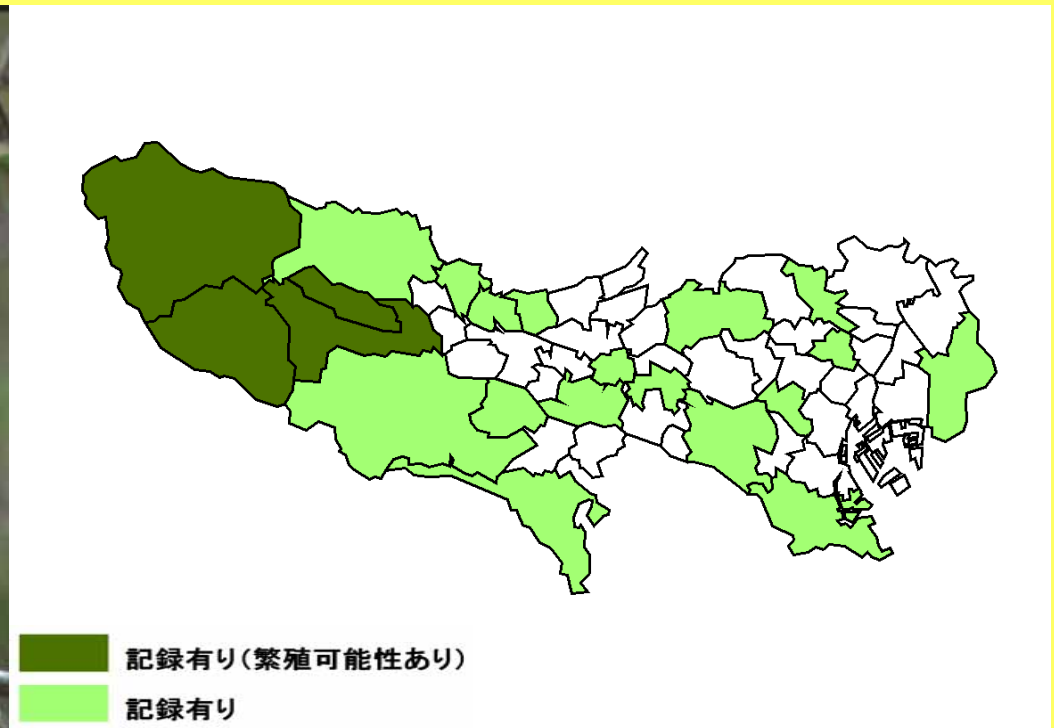
夏鳥として、多摩川・荒川の河川敷や東京湾岸の埋立地、浜辺などに渡来し、砂礫地の地上で営巣する。奥多摩地区でも多摩川中流域より下流で繁殖が記録されている。個体数はいずれも少なく、全体でも少数である。しかし、生息は渋谷区や豊島区など水辺の少ない自治体を除くと、広く記録されている。東京都の1970年代と90年代の繁殖期調査を比べると、多摩川流域での記録が減少し、荒川流域が増加している。水辺環境のない自治体や奥多摩の山地部では分布していない。



コマドリ

駒鳥 Japanese Robin *Erithacus akahige*

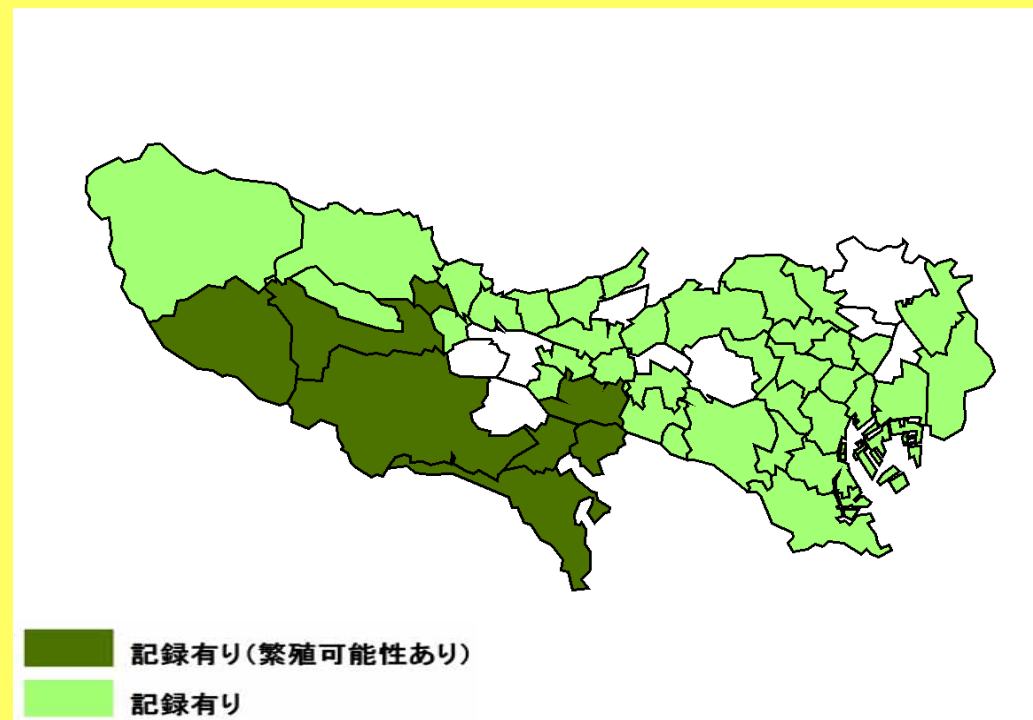
夏鳥として、奥多摩地区の標高1000m以上の地域に渡来し、繁殖している。そのため、奥多摩町の雲取山一帯の森林がおもな生息で、青梅市の御岳山や八王子市の高尾山では通過鳥である。ただし、以前に比べるとやや減少傾向がみられることと、近年標高の低い五日市あたりでも繁殖期に観察されているなど、変化が見られている。春秋の渡りの時期には平地部の緑地でも毎年観察されている。



サシバ

鵟 鵟 Grey-faced Buzzard-eagle *Butastur indicus*

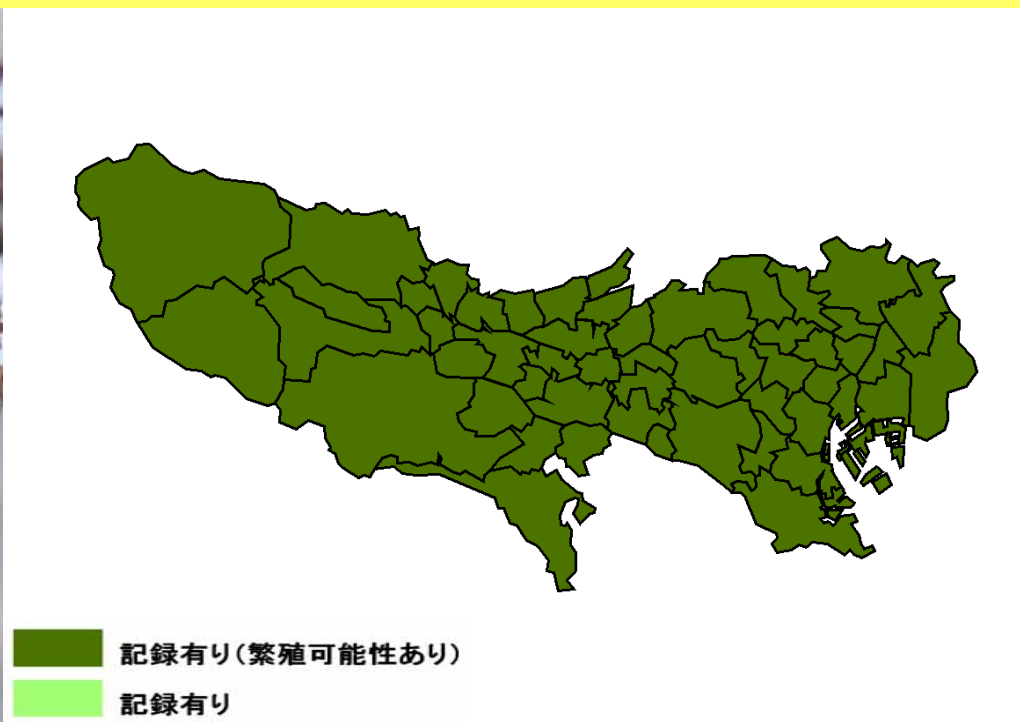
夏鳥として渡来し、多摩地域を中心に繁殖が確認されている。本種は両生類や爬虫類などを捕食するため、水田近くの樹林で繁殖することが多い。こうした食性のため、大規模な水田環境がない東京都では以前から個体数が少ない。また、オオタカの増加・都市部への進出とは逆に、本種の個体数は全国的に減少傾向にある。渡り期（主に秋）には、上空を通過していく姿をみかける機会も多く、この時期には、都内の広い範囲で観察されるので、多くの自治体で記録がある。



シジュウカラ

四十雀 Great Tit *Parus major*

留鳥として、都内全域で繁殖期の記録があり、繁殖もしている。しかし、1970年代の東京都の繁殖期調査の結果を見れば、下町地区ではまったく記録されていない。それは、本種がその生息圏のなかに落葉広葉樹林を必要とするからで、下町には緑地が少なく、かつ、その要件を満たしていないからだと言明されてきた。90年度と同様の調査では、下町各地に繁殖期も生息するようになり、本種が生息できる緑が出現したことを物語っている。



スズメ

雀 Tree Sparrow *Passer montanus*

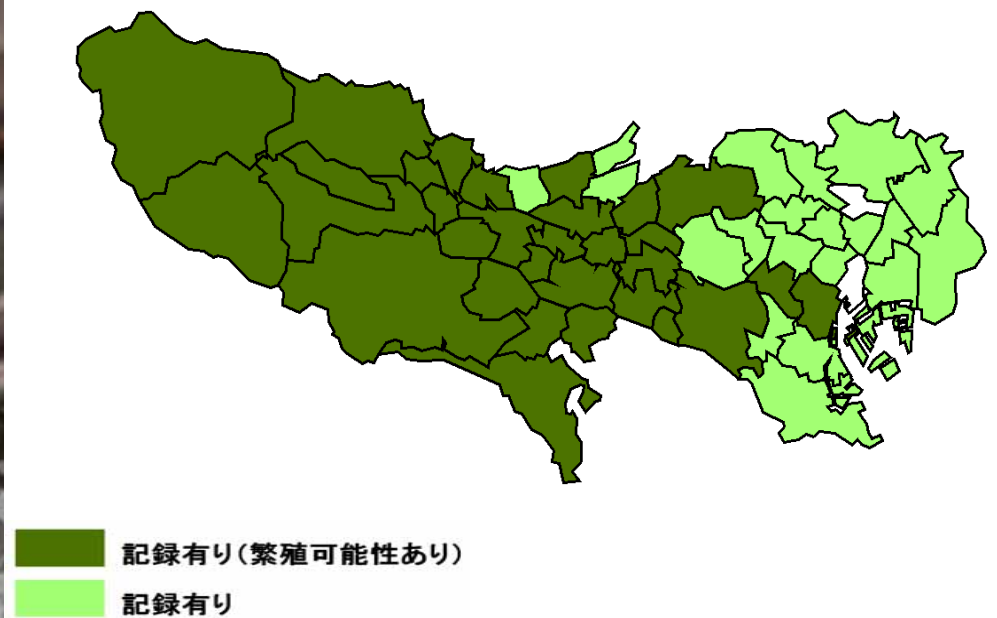
留鳥として多数生息し、全自治体で繁殖期に記録され、奥多摩の人家のない山地以外は生息している。東京都の1970年代と90年代の繁殖期の調査を比較してみても、ほとんどその分布は変わらない。しかし、詳細に見れば、奥多摩地区で繁殖期の記録が増えている。これは、鉄道や道路沿いに人口が増えていったことを表していると思われる。逆に、近年、都心部を中心として、個体数の減少傾向が見られる。これは、従来タイプの人家が減り、本種の巣穴が得にくくなっているからだと考えられている。



セグロセキレイ

背黒鵲鴬 Japanese Wagtail *Motacilla grandis*

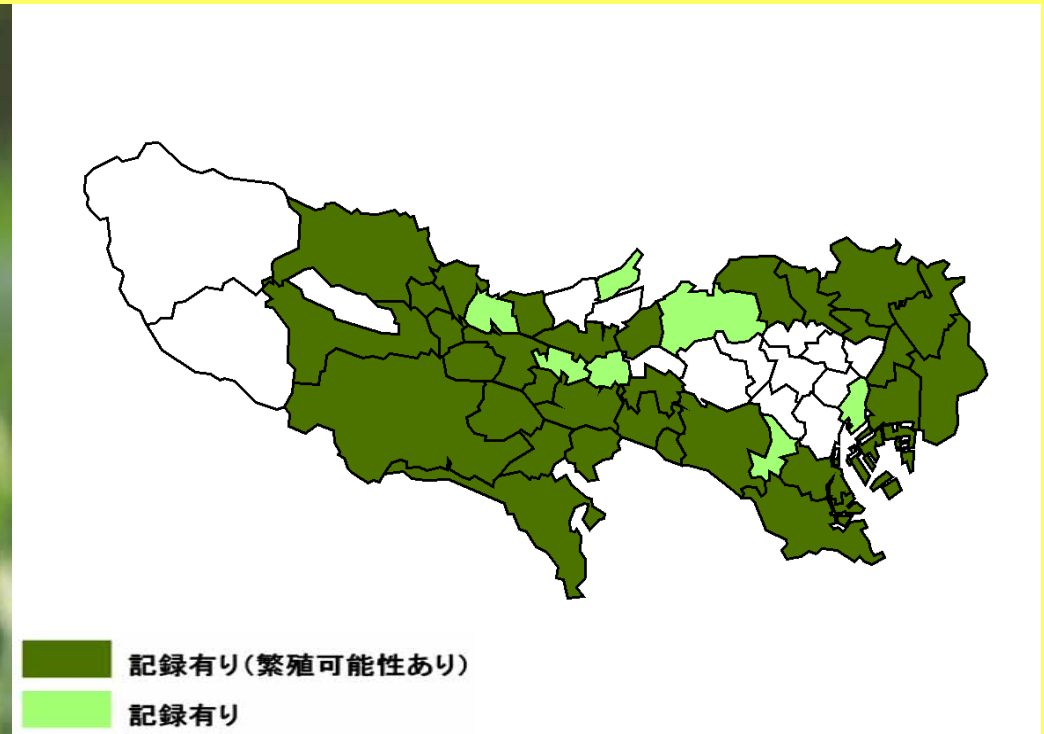
留鳥として、かつては、おもに多摩川の中流域以上の多摩地区から奥多摩にかけての流域でふつうに生息し、繁殖をしていた。しかし、近年は多摩川やその支流に限らず、比較的小さな河川にも進出して生息している。そのため、生息記録は以前に比べれば相当拡大していて、同じグループのハクセキレイ・キセキレイの分布と比較すると、水系の環境変化が一部読み取れる可能性が出てきた。



セッカ

雪加 Fan-tailed Warbler *Cisticola juncidis*

留鳥として、多摩川や荒川の河川敷、湾岸部の埋立地の湿地などのヨシ原や高径草地にふつうに生息し繁殖している。そのため、こうした草地がない地域や奥多摩などの山地には生息していない。4月～8月までよく囀り、飛翔しながら鳴くことも多いためよく目立つ。東京では、一年を通じて同様の環境に生息していることが多い。東京都の1970年代と90年代の繁殖分布地図を比較すると、大きくは変化していないが、多摩川の上流域で、やや記録が少なくなったり、荒川での連続性がなくなったりして、やや減少傾向があるとみられる。

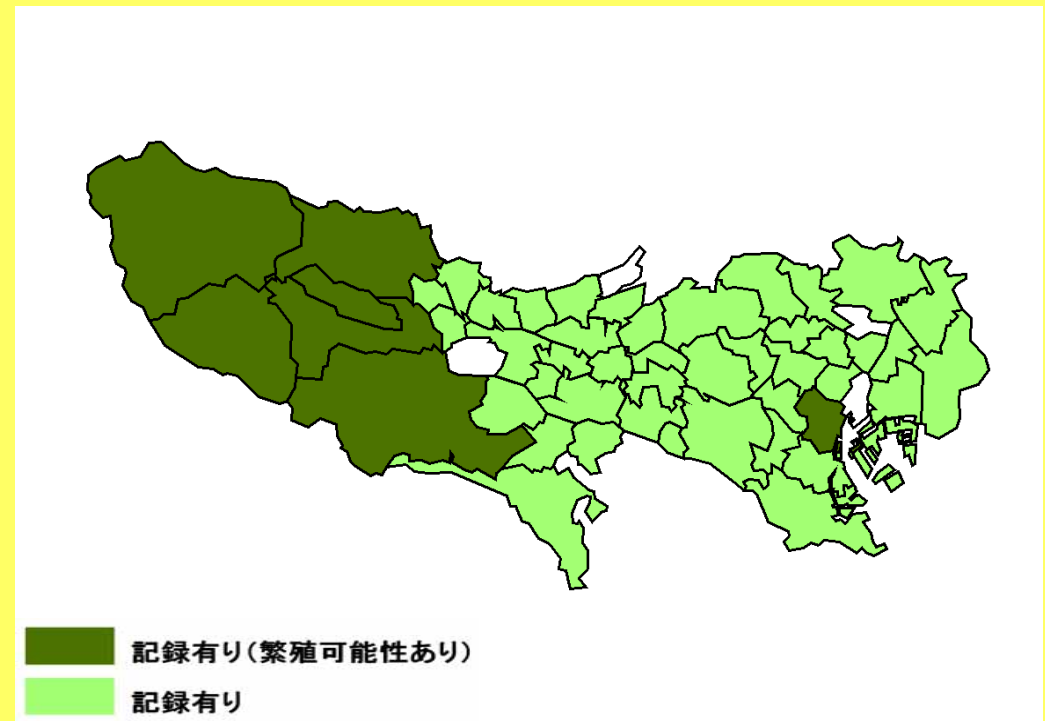


センダイムシクイ

仙台虫喰 Eastern Crowned Leaf Warbler

Phylloscopus coronatus

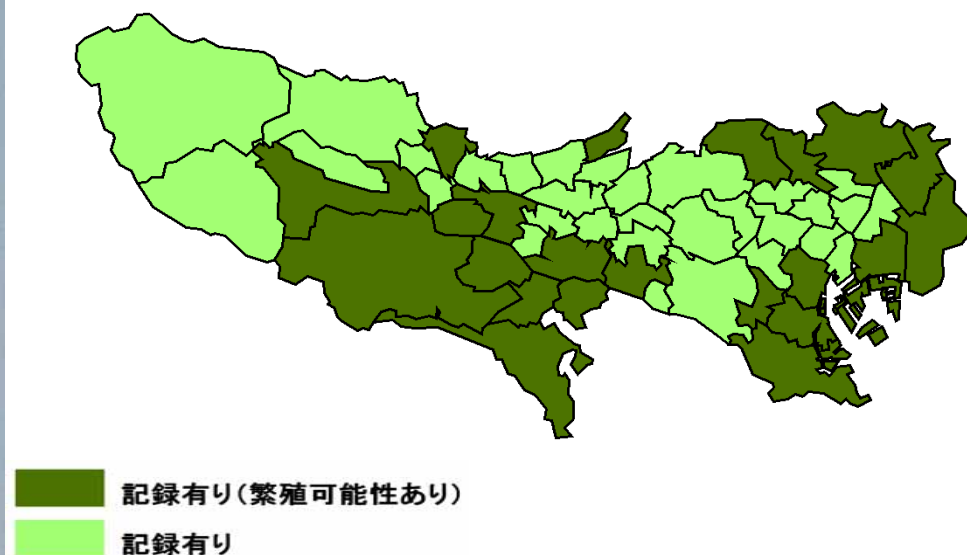
夏鳥として、奥多摩の山地部の落葉広葉樹林などにふつうに生息し、繁殖している。しかし、1970年代の東京都の調査と比べ、90年代は繁殖密度・ランクが下がっていて、減少傾向が見られる。高尾山でも探鳥会での観察個体数が減少している。ムシクイの中では一番個体数が多く、春は4月中・下旬、秋は9月～10月上旬ごろに、都内の緑地を通過していき、ほとんどの区市町村で記録されている。



チョウゲンボウ

長元坊 Kestrel *Falco tinnunculus*

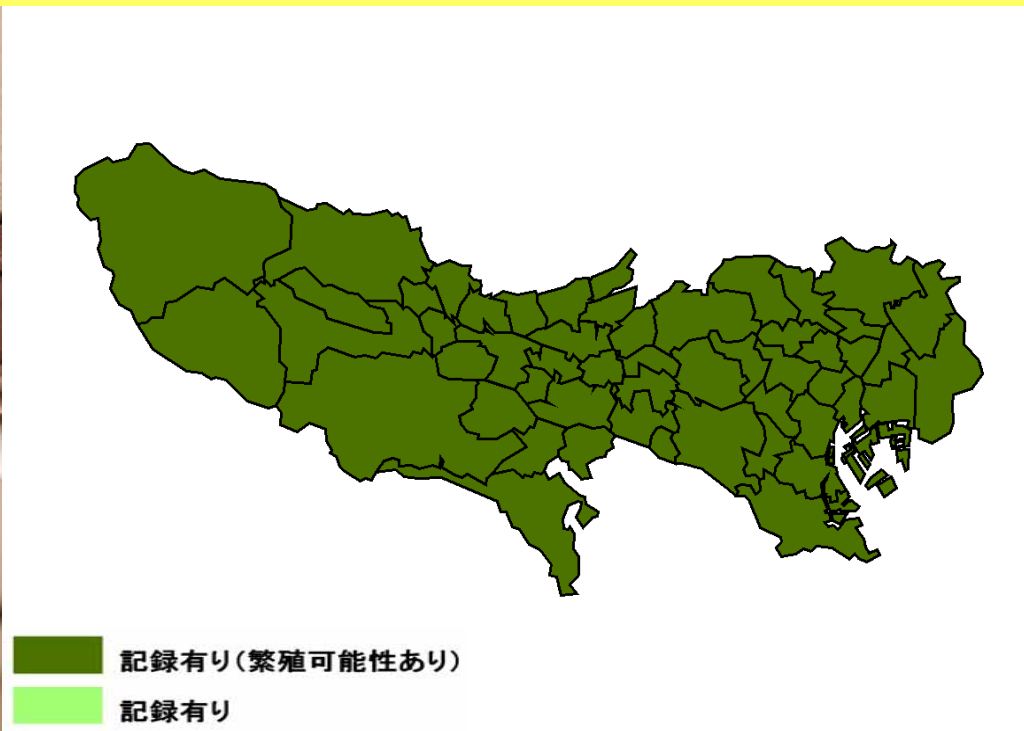
留鳥として、都市部の沿岸部や河川周辺、八王子市周辺などの郊外で繁殖が確認されている。しかし、かつてはこの鳥は冬鳥として少数見られるだけであった。1970年代末ごろから首都圏各地で生息・繁殖が記録され、80年代に郊外で増加し、90年代には23区内でも繁殖するようになった。本種は本来岩棚で繁殖していたが、同様の環境に見立てたビルや橋などの構造物で繁殖することも珍しくなく、多摩川に架かる橋では連続して営巣地が存在したり、市街地の中心部で営巣が行われている地域もある。冬季には広範に分布し、都内全域で観察記録がある。



ツバメ

燕 Barn Swallow *Hirundo rustica*

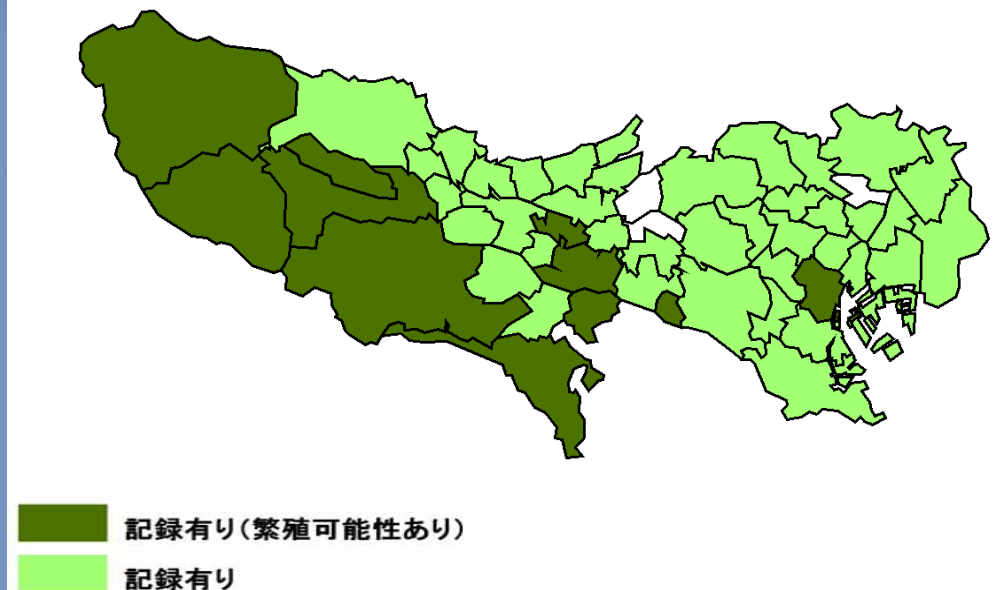
夏鳥として、奥多摩の山間部を除く、都内全域に渡来し、すべての自治体で繁殖をしているが、都心から郊外の多摩地区にいくにつれ営巣密度が高くなる傾向がある。本種は人家や駅、商店など、にぎやかな場所を好んで営巣する。都心部では1980～1990年代に営巣数が大きく減少した報告があり、その他の地域での動向は不明ではあるものの、食べ物である飛翔昆虫の減少や営巣環境の変化とともに減少傾向にあると思われる。



トビ

鳶 Black Kite *Milvus migrans*

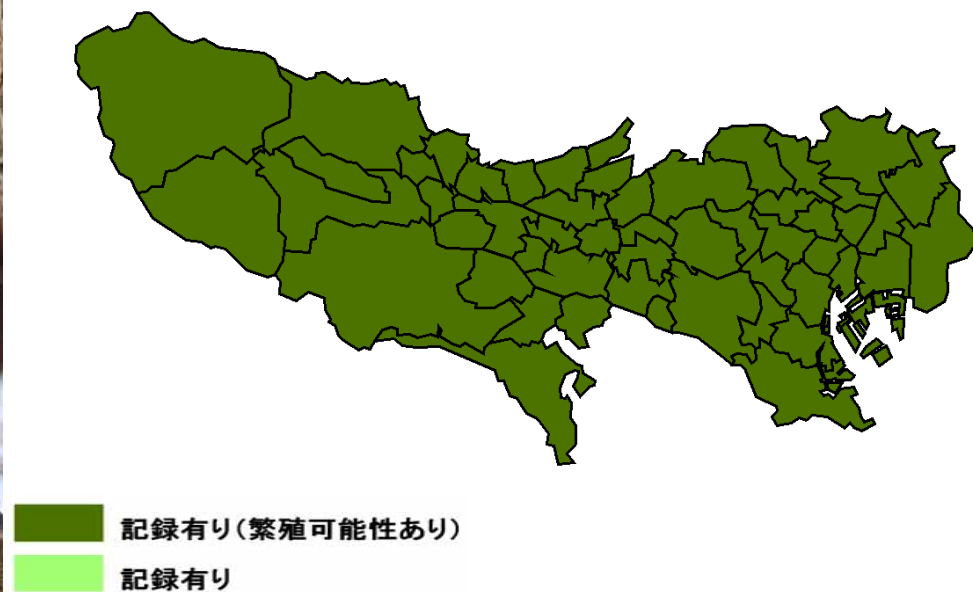
留鳥として、かつては都内に広く生息していたが、徐々に減少し、1970年代近年は町田市以西を中心とした地域で繁殖が確認されている。冬季には河川や沿岸部周辺では普通に観察され、都心部で観察されることもある。とくに動物の死骸や腐肉などを処理するスカベンジャーとしての役割も果たし、ゴミ処理施設などに依存して集団で分布することもある。また、非繁殖期には集団塹を形成することがあり、多摩川下流域では、夕方に北西に向かう個体群が観察され、各地区での環境利用も興味深い。



ハシブトガラス

嘴太鴉 Jungle Crow *Corvus macrorhynchos*

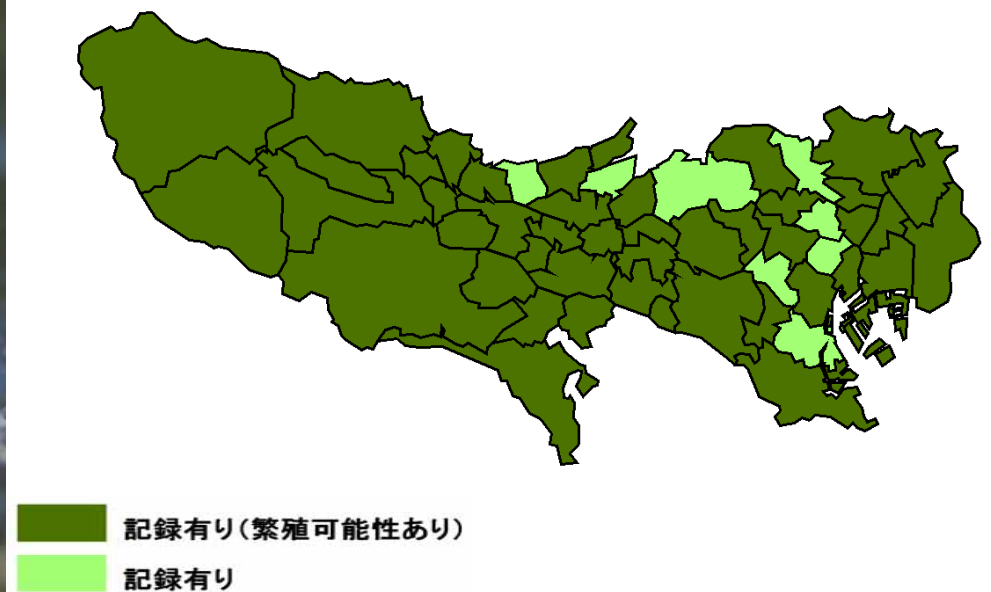
留鳥として、湾岸部から奥多摩・雲取山頂まで都内全域に多数生息し、繁殖している。1970年代と90年代の東京都の繁殖期調査を比べると、生息分布範囲が広がっているとともに、とくに平地部の繁殖ランクが高くなっている。また、全区市町村で繁殖が記録されている。社会的問題が発生しているので、これらの個体数と関係しているのか、ねぐら調査との関連性があるかなど今後検証していく必要がある。



ハシボソガラス

嘴細鴉 Carrion Crow *Corvus corone*

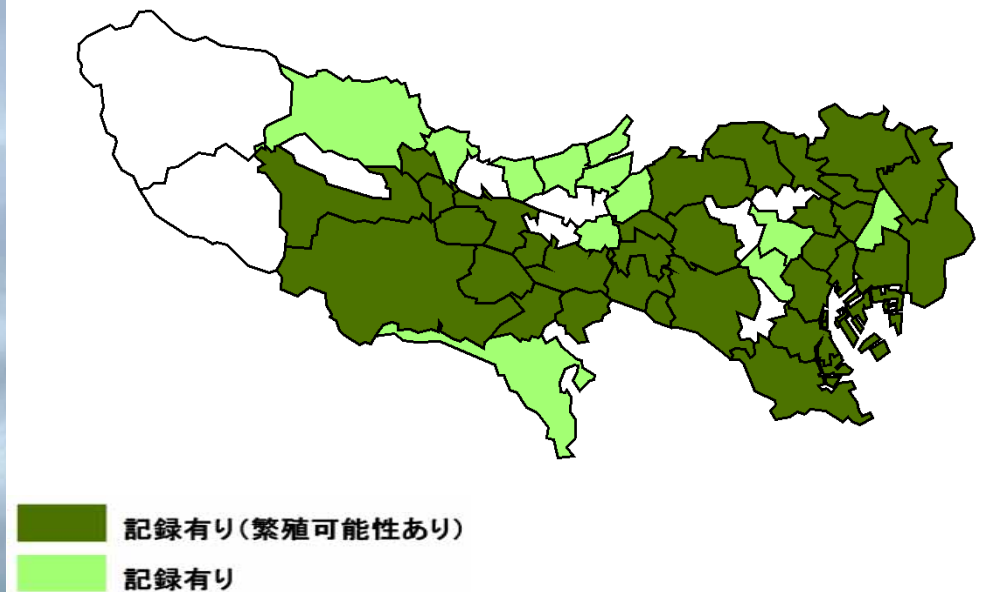
留鳥として、都心部と奥多摩の標高の高い山地を除く平地を中心に多数生息し、繁殖している。東京都の1970年代の繁殖期調査と比べ、90年代には繁殖分布は広がり、繁殖密度も高くなっている。とくに目立つ地域は足立・葛飾区や東京湾岸である。また、冬期には都心部のハシブトガラスの集団ねぐらの中に、本種が混じっていて、季節的な移動をしていることがうかがえる。



バン

鵜 Moorhen *Gallinula chloropus*

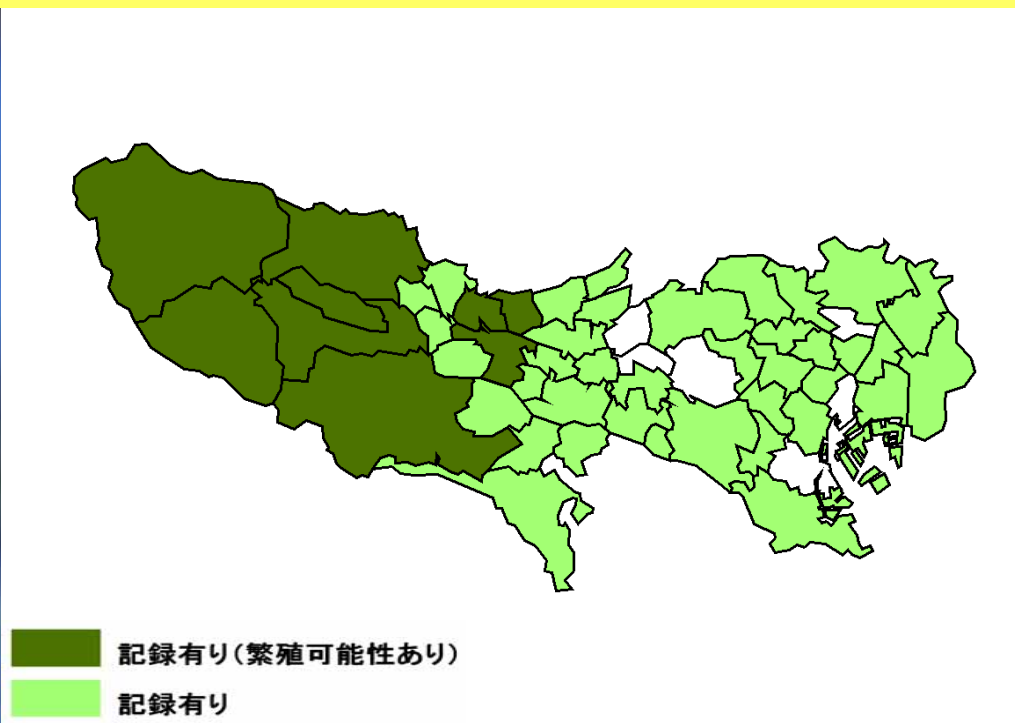
留鳥として、ヨシなどが生えている公園の池、河川や海岸の水辺などで、数は多くないがふつうに生息している。石神井公園（練馬区）や善福寺公園（杉並区）などの公園の池や江戸川や荒川、多摩川の流域などでは毎年繁殖している。奥多摩地区では、多摩川中流域より下流の自治体で繁殖記録がある。東京都の繁殖調査では1970年代に比べ、90年代は多摩川流域での営巣が減少しているようだ。



ヒガラ

日雀 Coal Tit *Parus ater*

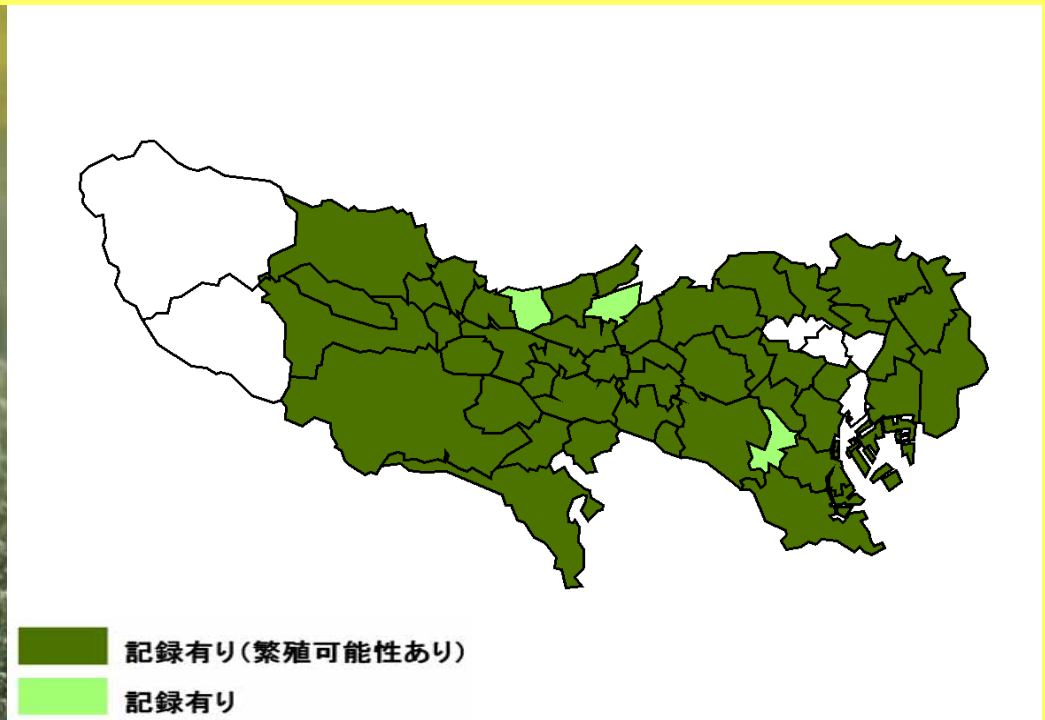
留鳥として、標高200m以上の奥多摩地区の針葉樹の多い林に生息し、ふつうに繁殖している。1970年代には狭山丘陵でも繁殖した可能性が高い。90年代には丘陵地以下の地域での繁殖記録はないが、高尾山あたりでは繁殖密度や繁殖ランクがあがっている。秋冬期は他のカラ類と混群をつくり平地部にも漂行するため、多くの区市町村で記録されている。マツやスギ、ヒノキなどの人工林で採食していることも多い。



ヒバリ

雲雀 Skylark *Alauda arvensis*

留鳥として、畑地や草がまばらに生えた河川敷や、東京湾岸の埋立地の荒地などに生息し、繁殖している。1970年代は、新宿を中心とした半径約10km圏と奥多摩の山地部を除く、都内全域に分布していたが、最近は草地や畑地の減少に伴い、多摩地区での減少が著しく、多摩川・荒川沿いの記録も明らかに減少している。これは東京都内から、本種の生息に適した環境がなくなっていることを意味している。



ヒヨドリ

鶇 Brown-eared Bulbul *Hypsipetes amaurotis*

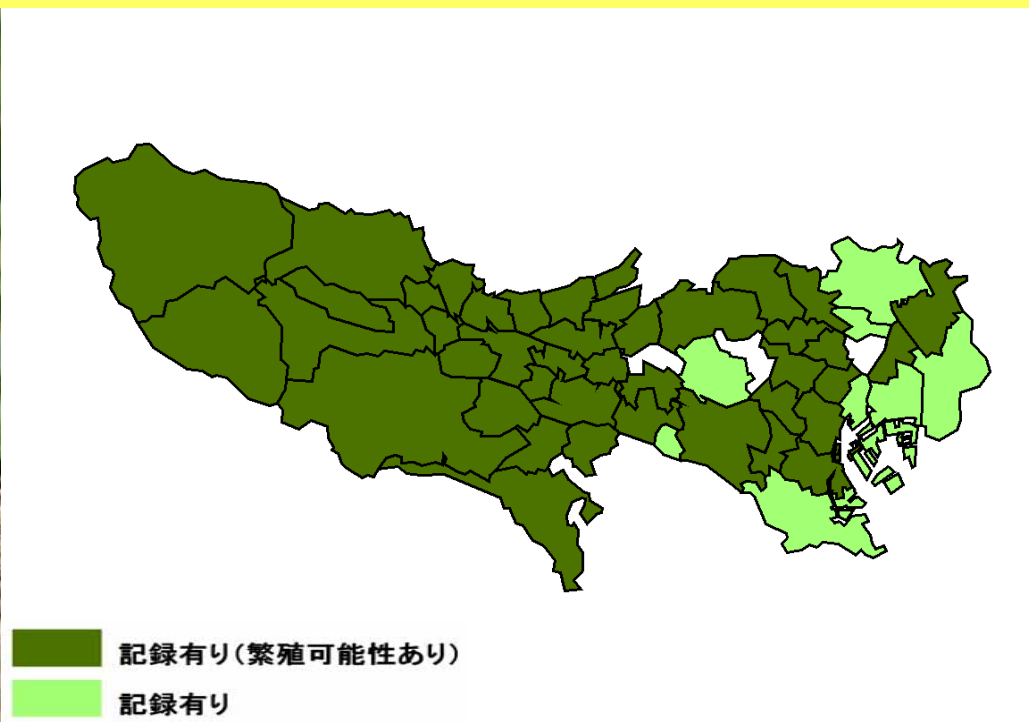
留鳥として、都内全域に多数生息し、全自治体で繁殖期の生息記録がある。しかし、この鳥は1960年代までは典型的な漂鳥で、奥多摩地区では繁殖していたが、平地部では冬鳥として記録されていた。60年代末から70年代初めにかけて、平地部でも留鳥化し、緑地の少ない下町でも繁殖するようになった。また、本来森林性と考えられていたが、街角の小さな緑やマンションのベランダに置かれた木などでも営巣するという、従来からは想像できないような生態も見せるようになった。原因は今もよくわかっていない。



ホオジロ

頬白 Siberian Meadow Bunting *Emberiza cioides*

留鳥として、畑の周辺の雑木林、低木の生える草地、緑地の多い都市公園、河川敷などに生息し、多摩地区から奥多摩の1000m以下の場所に広く分布する。1970年代には23区内の公園などでも繁殖していたが、最近は皇居や多摩川や荒川の河川敷以外は生息していない。都市化が進み、農地が減少したことや、河川敷の整備が進んで、本種の好む環境がなくなってきたためと思われる。



ムクドリ

椋鳥 Grey Starling *Sturnus cineraceus*

留鳥として多数生息し、全自治体で繁殖期に記録され、奥多摩の山地部以外は生息している。東京都が実施した1970年代と90年代の繁殖期調査を比べてみても、あまりその生息状況は変わらない。しかし、湾岸部では生息記録が増えている。これは、この地域に建造物が建ち、本種が繁殖できるような空間が生じたためと考えられ、全体的にもやや分布が拡大している。

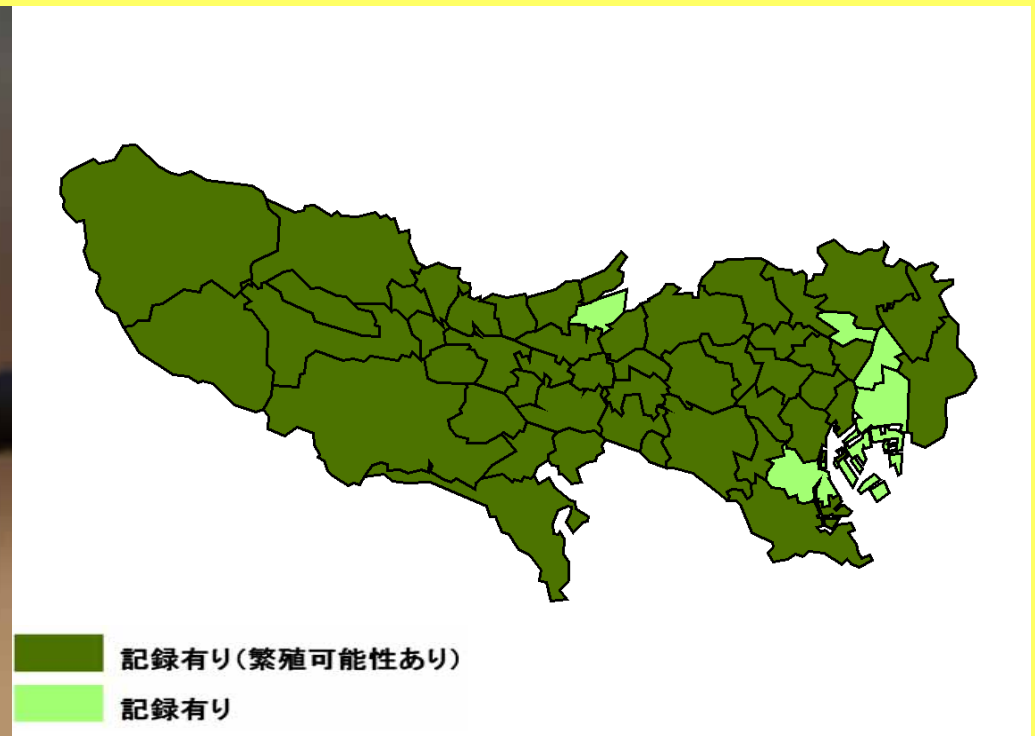


■ 記録有り(繁殖可能性あり)
■ 記録有り

メジロ

目白 Japanese White-eye *Zosterops japonicus*

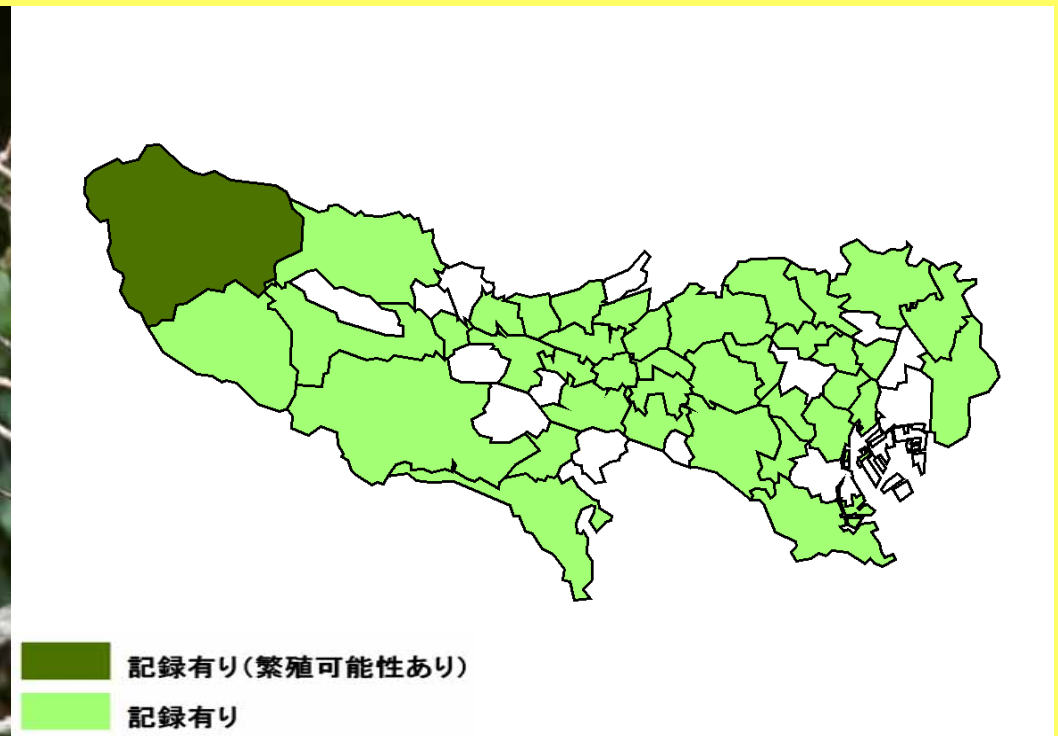
留鳥として、都内全域に生息し、隅田区を除き、繁殖も記録されている。かつてはこれほど広範囲に分布せず、都心部にもいるが、どちらかというと山の鳥という印象だった。しかし、1990年代の東京都の繁殖期調査では、奥多摩の1000m以上の山地以外は繁殖期に記録され、生息分布域が拡大していることが明らかになった。これは、メジロの好む樹種が庭や公園、街路などに植樹されたためと推測されている。



メボソムシクイ

目細虫喰 Arctic Warbler *Phylloscopus borealis*

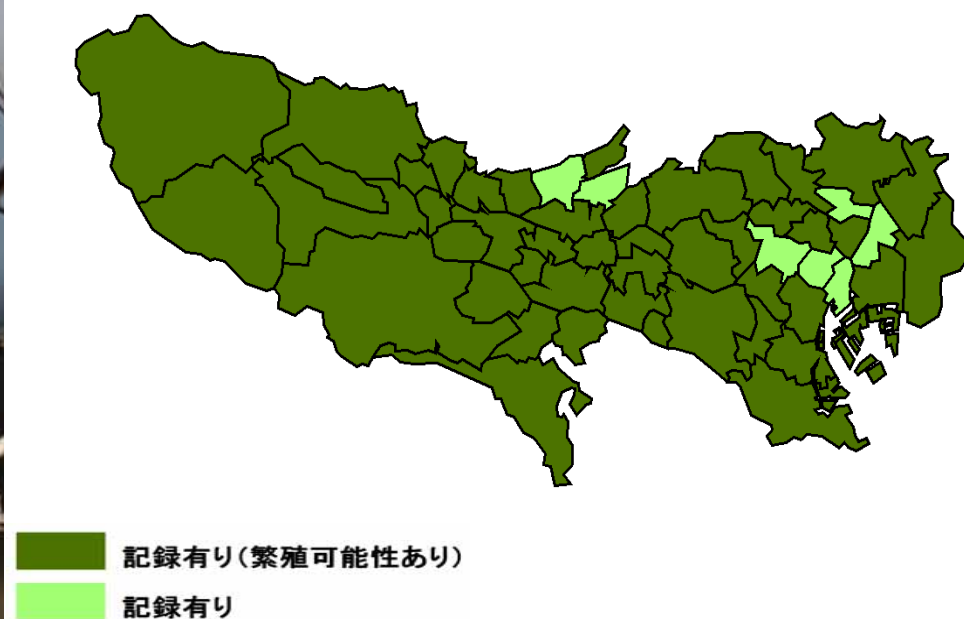
夏鳥として、標高1500m以上の雲取山付近の亜高山帯針葉樹林におもに生息し繁殖しているが、営巣など具体的な事例はない。1970年代の調査に比べ、90年代では減少傾向が示された。また、標高の低い地域でも記録された。春秋の渡りの時期には、平地部の緑地でも観察される。5月末頃に、鳴き声が明らかに違う別亜種が都内各地の緑地を通過する。この亜種については諸説があり、現時点では特定できていない。



モズ

鴟 Bull-headed Shrike *Lanius bucephalus*

留鳥として、低木のある草地や畑の周辺部の雑木林などを好み、適地があれば、平地部から山地部まで生息するが、東京の場合は、23区の郊外から、多摩川・荒川の河川敷、丘陵地、奥多摩の低山まで広く分布し、全自治体で記録されている。都心部の一部をのぞき繁殖しているか、繁殖の可能性がある。しかし、1990年代の東京都の繁殖期調査では、70年代に比べ、その分布は明らかに減少が見られ、本種の適地が少なくなっていることが明らかにされている。



【作製】

分布地図：嶋田

解説：川内・西村・真下・吉成・渡辺、

写真：小原伸一・土橋信夫・切池・吉田

全体構成：切池